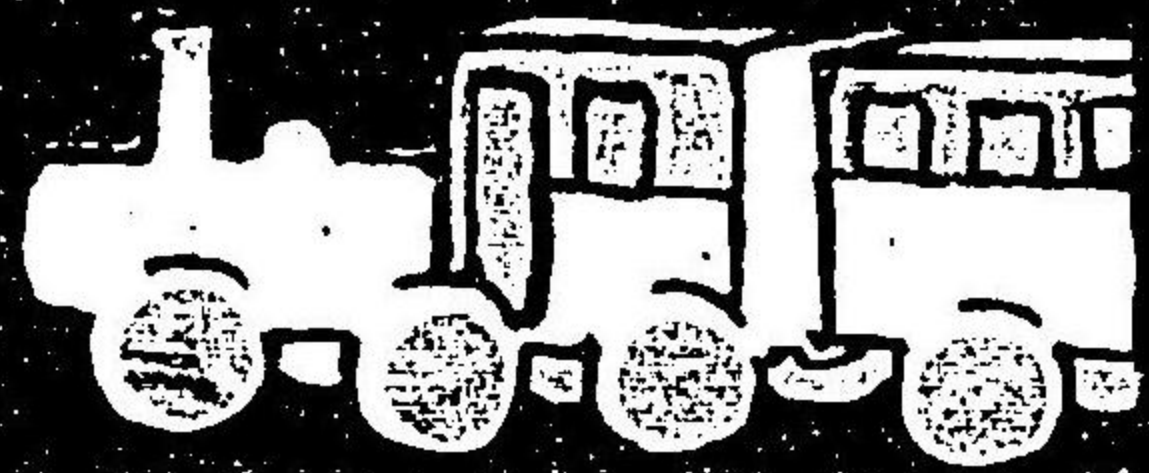


內地旅行





十
四

特20
903

内地旅行

(九)(八)(七)(六)(五)(四)(三)(二)(一)

| | | | | | | | | | |
|-------------|-----------------------------|--------|-------------|------------------|------------------|-------------|--------|--------|--------|
| 養 老 瀧 | 名 古 屋 …… 岐 阜 | 熱 田 | 矢 矧 川 | 佐 夜 中 山 | 三 保 松 原 | 足 柄 山 | 鎌 倉 | 出 發 | 目 次 |
|-------------|-----------------------------|--------|-------------|------------------|------------------|-------------|--------|--------|--------|

明治
38 2 27
内交

内地旅行目次 おはり

3

(六)(七)(六)(五)(四)(三)(三)
 須磨…舞子 神戸 神武陵 吉野 高野山 和歌の浦 堺

(三)(三)(元)(六)(七)(六)(五)(四)(三)(三)(二)(二)
 大阪 琵琶湖 比叡山 御苑…西山 京都…東山 宇治 法隆寺 奈良 笠置山 内外宮 關西鐵道 彦根

2



内地旅行

文學博士 芳賀矢一述

出發

私は今度學校を卒業した。幸ひお父様が方々を見物にお出かけなさるので、私も一所につれていて下さいと願つた。出立は四月三日の神武天皇祭、天氣も麗か、家々には國旗が翻つて居る。朝の九時に新橋から出發した。

横濱に着いてみると、港に國々の汽船や軍艦が澤山に泊つて居る。西洋人や支那人が住んで居る町を見て、波止場から小蒸汽に乗つた。生れて始めて船に乗つたので、波を切つて進んで行く勇ましさ、面白くてたまらない。

横須賀に着いて、お父様はお友達をお尋ねになつた。此人は海軍士官で造船所を見せてやらうと、つれていつて下さつた。

『こゝは日本第一の造船所で船渠も一番立派です。』とお父様のお話しの通り、大きな車、小さな車、大きな槌、小さな槌などが蒸汽の力であちらこちらに忙しさに動いてをる。太い材木が庖丁で大根を切る様に造作なく切れる。鍛冶場の響は耳も聳になるかと疑はれる。一ツの船渠の中には大きな船が一艘はひつて居つて、多くの職工が工事をして居る、能くは解らぬが日本の海軍が大變に強いのは尤もなことだと思つた。造船所の見物に半日程

かゝつて、次の日は浦賀にいつてヘルリの記念碑を見た。

『今から五十年程前、米國の水師提督ヘルリが軍艦を率ゐてこの處へきて國を開いてお互に貿易をしようと思つたが、我邦では世界の容子も知らぬから、大騒ぎになつた。とう／＼それを承諾することになつて、それから段々と外國との交際も開け、西洋の容子もわかつてきて、我國が今日の様な立派な有様になつた。それだからヘルリの來たのを紀念のため此處にこの碑を立てたのである。』とお父様のお話で、また色々とその時代の面白い話を聞いて寝た。次の日は汽車で鎌倉につく。

(二) 鎌倉……江島

鎌倉は頼朝の府を開いた處と讀本で覺えて居たが、來て見れば何

だか寂しいやうな處であるから、

『阿父様。鎌倉は何だかつまらぬ處の様でございますね』

といふとお父様は。

『昔源頼朝が覇府を開いた處で、其時分の都であつたが、今はこの様にさびれた。併し夏は東京あたりから海水浴、冬は暖かいといふので人が澤山くる様になつて、是れだけ新らしい家も出來た。廿年程前はもう一層寂しかつた。頼朝の父義朝が平家に殺されたときは頼朝が十三の歳で、清盛に捕まつて伊豆に流されたが、三十三歳の時いくさを起して弟の範頼義經等と一しよに平家をうち亡ぼし、この鎌倉に住居を定め、征夷大將軍となつて、日本中を鎮める様になつた。頼朝はナポレオン見たやうに頭の大い丈の低い人だつた。』

とお父様のお話を聞きながら歩行て鶴ヶ岡八幡宮に參詣した。大

きな華表をくゞつて、赤い橋を渡つて神樂殿を見た。本社ほんしゃの正面しょうめんに石段いしだんがあつて、其左り側わだちに大きい銀杏ぎんぎよの樹きがある。

『實朝じつちょうが公曉こうきやうに殺されたのはお前まへも知つて居ませう。その時公曉はこの木の影かげにかくれて居つて、實朝じつちょうがあゝの石段いしだんを下りて來るところを斬つたといひます。それで頼朝よりちようの天下てんかはわづか三代さんだいで滅ほろびました。』

と阿父様あふさまが仰おぼしやるから、

『それでは實朝じつちょうは弱よわかつたと見えますね。』

『それでもなかつたらう。歌うたも中々なかなか上手うまで、立派りっぱな人ひとであつたらしい。百人ひゃくにん一首いっしゆで鎌倉かまくら右大臣みぎのちじんといふのはこの實朝じつちょう公こうである。何なにしろあの時とき分ぶんは種々しゆしゆと込入こみいつた事ことがあつて思おもふ様にいかぬ事こともあつたのだらう。死しなれたときはたつた廿八にじゅうはちであつた。その朝あさ立たいで、ぬしなき宿やどとなりぬとも軒端のきばの梅うめよ春はるを忘わするなといふ歌

をよまれたといふ話で、殺されることをむしが知らせた様だ。』
 五六町歩いて鎌倉宮についた。これは大塔宮護良親王の祀つてあ
 るお宮で、背後には親王が足利直義のために押込まれていらつし
 やつたといふ土牢がある。神主に頼んで戸をあけて貰つて中をみ
 た。土の牢は煙を十疊位も布ける程の穴で、中からしめつぽい冷い
 様な風が吹上げて来た。其の時の話をお父様から聞て何となく悲
 しくなつて、違つた道を通つて大佛の方へいつた。

大佛の境内は掃除も行届いて櫻が澤山に咲いてゐる。散歩の人
 ちらほら見えた。東京の上野公園のよりは餘程大きい。長が三丈三
 尺あるといふ腹の横の方に入口があつて、佛様の腹の中にはひる
 と、中に観音や阿彌陀の像などがある。其處を出て長谷観音に行つ
 た。石壇を幾つともく登ると本堂である。ズット見渡せば鎌倉の町
 は云迄もなく海も山も一目に見えて景色がよい。御開帳を頼むと、

本堂の背後の狭い潜り戸をあけて、暗い處につれていつて、丁度私



鎌倉長谷観音
 鐘の音
 くつも
 燭をい
 僧が蠟
 程の小
 尊の顔
 から足
 まで見
 える様
 にして
 此像
 は十

一面觀世音にして佛工春日の作丈け二丈六尺。一本の樟樹で作る。

といつてきかせた。私は觀音様の足指を自分の手で測つて見たら、丁度手を廣げて指を延ばしたゞけあつた。本堂を下り少しあるくと星月夜の井がある。

昔し此井の水には晝でも星の影が映つたが或時誤つて庖丁をおとしてから星が見えなくなつたと言ひ傳へてをる。

とお父様のお話を聞いた。それから坂を登つて極樂寺の切通を通つて電車に乗る。この濱邊は七里濱といつて左の方に突き出て居るのが稻村ヶ崎で新田義貞が北條征伐の時に黄金作りの太刀を投げ込んで龍神に祈つたが忽ち潮が干てそこから鎌倉に攻め入つたといふ古跡である。江の島は右の方に青く霞んでみえる。本當に繪のやうで繪の島と書く方がよからうとおもつた。

江の島に着いた。兩側に貝細工の店が澤山ある。石段を上り、山道を傳つて窟を見にいつた。入口の危なつかしい棧道を傳つて穴に這入ると初めはなかく廣いが段々と狭くなつて、上からは水が滴り落ちる。奥の方に燈が小さくぼんやりと見える。此穴は富士の人穴にいつゝいて居ると案内者の爺さんがいつた。何だか物凄くなつて、急いで洞穴を出た。年をとつた漁夫が

榮螺を取らして下さい。

と頼む。阿父様が幾何かの金をお遣になると眞裸に成て、水の青く渦巻いて居る中へザブンと倒さまに飛込んだ。斬くたつて榮螺を三つ計り手に持つて上つて來た。島をあちこち歩行いて宿屋にはひつて波の音を聞きながら寝た。

翌朝早く起て障子を明けると眞正面に富士山が大きく峙つて、まだ日が出なかつたから、海も空も蒼白く清らかで、如何にも崇高い

心持がした暫らくすると日が東から上つて、山の色も海の色もきら／＼として、其奇麗な事譬へ様がない。電車で藤澤に着いて、東海道線の汽車に乗つた。大磯、國府津あたりは右に山が見え、左には海が眺められて誠にいゝ心持である。

(三) 足柄山

松田の驛、これから箱根の山にかゝる。汽車の前と後とに汽罐車をつけて段々進むと、墜道がいくつとなくある。ビューと云へばすぐ暗くなり、ゴ！と響くかと想へば又明るくなり、明るくなつたおもへば又すぐ暗くなる。溪川が岩にあたつて白い沫を飛ばして流れてゐる。その溪川に立つて、小鮎か何か釣つて居る人もある。御殿場に着いたとき、

こゝは箱根とは云ふが、實は足柄山である。昔し新羅三郎義光と

云ふ人が此山で笙を吹いたと云ふ話がある。新羅三郎義光といふのは八幡太郎義家の弟であつた。兄さんが奥州の征伐にいつて居るから、自分もゆきたいと願つたが許されぬ。とう／＼役をやめて兄さんの加勢に出かけた。この義光は音楽の上手な人で、豊原時元といふ先生から笙を吹くことを習つて、大事な奥の手まで教へられたが、この秘曲は先生の子の時秋もまだ習はんものであつた。そのうちに先生が死んで仕舞つたので、この度義光が奥州へ出懸けるといふについて時秋はどうかしてその秘曲を知りたいとおもひ、義光のあとを追うて、この足柄山まで来た。義光も時秋の心中を察して馬から下りて草の上に楯を布いて、時秋と差向に座つて笙を吹いた。心の中では是から軍に行つてはいつ死ぬか知れぬから、これが吹き納めかも知れぬと、心をこめて吹いて聞かせた。月は燈々と冴え渡つて笙の音は高くなり

ひゞいた。その時の有様はどんなであつたらう。今でもよく畫にかいてある。

と仰しやつた。

汽車の窓から見ると富士の山がすぐ前にみえて上の方は雪で眞白であつた。さすが日本第一の山だと思つて見て居ると、富士山の形をした饅頭を賣りに來た。

(四) 三保松原

御殿場からは下り道で汽車もはやく、右の方は廣い野原で撫でた様にうつくしい。これが富士の裾野と云つて昔し頼朝が諸國の大名を聚めて卷狩をした處だそうだ。曾我兄弟仇討のことなどをおもひ出して居る中、汽車は愛鷹山の下をすぎて、三嶋沼津などだんくと進んでゆく内に、鈴川驛についた。こゝはかの名高い富士川

が海にそゞぐ處で、富士山を見るのには一番宜いのである。此邊の濱邊を一體に田子の浦といつて、

『田子の浦に打出て見れば白砂の富士の高嶺に雪はふりつ』とある山部赤人の歌はこの邊で詠んだのだらう。此のさきが興津といつて海端に名高い清見寺がある。その海を清見瀉といふが、……あゝもう來た。あすこに海の中に突出て居る松林がある。あれが三保の松原である。三保の松原に就ては天人の羽衣の話がある。これはお父様のお話である。

丁度今時分の様に長閑な春の朝に漁夫が三保の松原にあらがつて浦のよい景氣を眺めて居ると、どこともなく音楽が聞えていゝ香がする。不思議と思つて向うを見ると、松の枝にうつくしい衣が懸つて居る。ドーもうつくしい衣で、珍しいから家に持て歸て寶にしようかと考へて居ると、天人がそれをみて、その衣は自分

のだから返してくださいと云ふ漁夫は自分が拾つたのだから
 持て歸ると云つてきかぬ。天人がそれは天人の羽衣で人間にや
 れる物ではないと云つて争つてゐたが漁夫ドーしても返さぬ
 から、天人は大きに羽つて、羽衣がないと天へと歸られぬと大變
 に嘆いた。漁夫も氣の毒になつて、そんなら返して上げよう。其代
 り天人の舞を舞つてお見せなさいと云ふと、天人はそれは承知
 した。しかし、羽衣が無くては舞はれぬから、先づそれを返して呉
 れといふ。漁夫は天人がそんなことを云うて騙すのだらうと始
 めは疑つたが、天人がイヤ疑ひは人間に在るので、天には偽りの
 ないものだ」と云つたので耻かしくなつて、とう／＼羽衣を返し
 た。天人は喜んで舞をまつて、天に登つて行つたといふ話で、これ
 は能にも作つてある』

汽車は水際を通つて、綺麗な白い小さい波が軌道の下までくる様

で岩の大きなのや小さなのがあつて、あたりの村には小供が五人
 六人と群を爲して遊んで居た。

(五) 佐夜中山

間もなく静岡に着いた。

「静岡市は昔は府中又は駿府と稱て、今は静岡縣廳がある。此城は
 徳川家康が築いたので、前將軍慶喜公もしばらく住んで居られ
 た」

汽車は島田驛を過ぎて大井川を通つた。大きい川だが水が少い。

「昔の旅行では此川が一番の難所で、水が出る時は通行が止まる。
 少し減ると、蓮臺越と云うて、旅人を臺の上に載せて大勢の男が
 肩で擔で、この川を渡つたものだ。」

大井川をこすと、長いトンネルに這入つた。お父様が

『これは昔の街道では金谷から日坂に出る間で佐夜中山といふ山だ。むかしある女が金谷に居る夫のところへゆかうとこの山に來かゝつたが、盗人が出て、その女を殺した。腹の中にある子がその時生れて出たとのことと近所の坊さんが助けて、餵を買つて養つてやつた。この事を佐夜中山夜泣石といつて芝居などにも作つて居る』

とお話になつた。暫らくして大井川にも負けぬ大きな天龍川を渡つて濱松に着いた。お父様が

『こゝも徳川家康の居た所で、北の方には三方原といつて名高い古戦場がある。武田信玄が三河國に攻めて這入らうとした時、家康が此處で大合戦をした處だ』

(五) 矢矧川

舞坂を通ると濱名湖になる。二里四方程の湖で碧々とした水の上の細い間を汽車が走るの誠によい景色である。湖水の向うに山が取圍んで、水の上には漁人の舟が木の葉の様に浮んで居る。私は東海道一番のよい景色だと思つた。

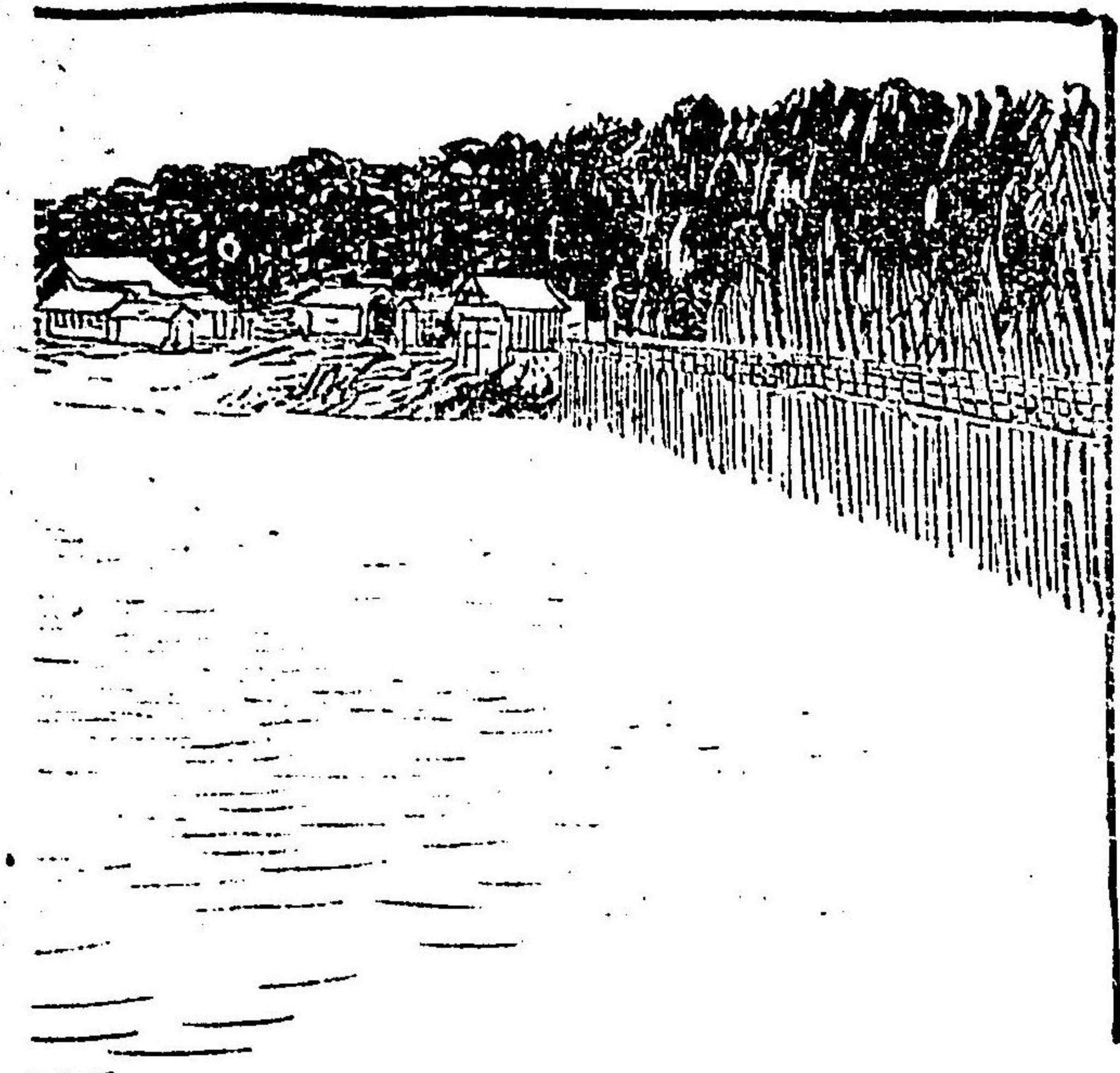
『阿父様此邊に家があつたら私は毎日々々舟に乗て釣に來たいとおもひます。この邊では何か獲れるでせう』

『如何にも良い景色だ。此處では鰻と蛤が名物です』

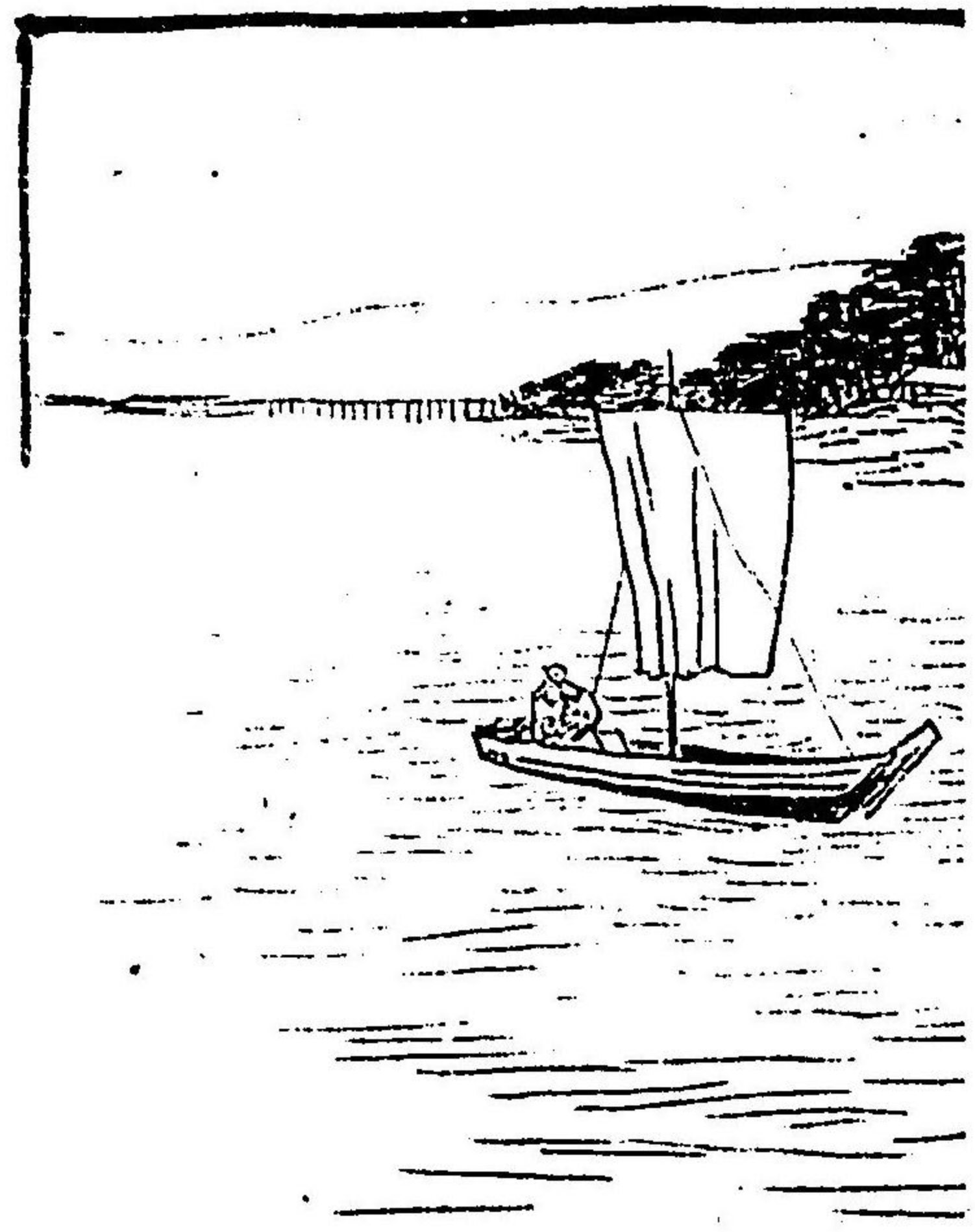
『阿父様私はこの川の名はとづくに知つて居ます。秀吉が小さい時、此橋の上に寐て居たところを蜂須賀小六が通つて感心したといふ話を知つてゐます』

『秀吉はどこで生れたか知つて居ますか』
『秀吉の生れた處は尾張の中村でせう』

『左様。その中村と云ふのは名古屋市の近所で、いまでも木下屋敷と云つて圓い竹藪で周圍に籬がある明治十八年に其傍に豊國



名 濱
神社を立てた。この近所での古跡は池鯉鮒といふ町から二三里ゆくとむかしの業平朝臣がからころもきつゝなれにしつましあればはるはるきぬるたびをしぞおもふとカキツバタの五文字を歌のはじめに書いてよんだ八橋といふところがある。』



東の方は知多灣で、西南に伊勢の海を控えてゐるから、物産も澤山あり、港もよくて、商業も盛んである。伊勢灣に向いた處に野間と云ふ處があつて、此處にはふるいお寺がある。頼朝の父義朝が京都から逃げて來て、長田忠致と云ふ人を頼つたとき、忠致は其子の景致と相談して、義朝の風呂に入つた時に力士をやつて之

湖
大府停車場では
『半田武豊線乗り換へ』
と驛夫が叫ぶ。
『お父様、半田武豊線と云ふのは何處へゆくのですか』
あの線路は尾張の知多半島へ行くので、知多は

を殺させた。義朝にも豪い家來があつて、なか／＼強かつたけれど、何しろダマシ打に逢たから仕方が無い。家來共も皆戰つて死んだ。あとで頼朝が天下をとつてから、高野山から坊主を呼んで、義朝の法事を務め、忠致を義朝の墓の前で殺したといふこと、今でも義朝の墓や義朝の首を洗つたといふ池、長田等を埋めた長田山などいろ／＼の古蹟がある。其外信長の子信孝の墓……秀吉に負けて死んだ信孝の墓もこゝにある。

長田は卑怯な奴だ、と考へて居る間に熱田に來たから下車して神宮に參詣した。

(七) 熱田

八方に鳥居があつて境内は廣い、こゝには神様が五座あるので中央が日本武尊で左と右とに天

照皇太神、素盞鳴尊と云ふ二柱の男神と宮簀媛命、建稻種命と云ふ二柱の女神とを祭つてあるこの正殿のわきにあるこれが土用殿で草薙の劔を祀つてある。草薙の劔のことは知つて居ませう。

先生から聞きました。日本武尊が御東征の時に賊は尊を野原に誘き出して草に火を放けて焼殺さうとした。處が尊は劔を揮つて草をお薙きになつたので、却て賊の方へ向けて焼けて行つたと云ふ話を承りました。

それがさつき通つた焼津といふところでのことです。それから尊が近江の膳吹山の惡神を退治しようとして御出懸なさる時、此劔を宮簀媛にお預けなされたが尊は途中で毒虺にかゝつてお薨れなさつたから、此劔を此宮に祀ることになつたのです。この劔は即ち三種神器の一ツでむかしある坊主が之を盗み出して、外

國へもつて行かうとしたが、海上の嵐にあつてゆくことが出来ぬ。劔はいつの間にか本の處へ戻つて居つたといふ話もある。日が暮れてあたりが暗くなつて、神殿の燈が神々しく見えた。

(八) 名古屋……岐阜

熱田から車で一里餘り町續きを通つて名古屋に泊つた。なか／＼賑やかな町である。

「名古屋は昔しは信長の居つた處だが、其時分はまだ／＼寂しい野原であつた。其あとで家康の子義直がこゝにすむこととなり、城を築いてから次第に繁昌になつて、立派な町になつた。今は愛知縣廳のある處で、第三師團もあり、色々の學校もあつて、商賣も繁昌で三府に次いで賑やかな處になつた。」
次の日早く起きて市中を散歩し、お城を見た。

「あの城の上にあるのが名高い金の鯉で、こゝからは小さく見えるが、あれでも高さが八尺餘りもある。明治の初めに一旦宮中に獻上して、興國博覽會にも出たが、町のものが元の様にして欲しいと云ふので、又たあの通り城の上へあげた。」

阿父様のお話を聞いて如何にも珍しく思つた。

汽車に乗つて町を外れた時分にお父様は北の方を指して、

「あの邊に小牧山といふ山がある。家康が彼處に居て秀吉が犬山と云ふ處に陣取りをして大きな戦争をした。この時は秀吉が負軍でとう／＼家康と和睦した。徳川が天下を取つたのは實はこの軍が本になつた。」

と仰しやつた。

岐阜を通つたときお父様は

「此處に長良川と云ふ川があつて、ソコは鵜飼で名高い處だ。鵜飼

といふのは鵜を使つて鮎を取るので毎年五月から十月頃までする舟に篝火を焼くと鮎が皆な火の方へ寄ってくる。それを鵜が呑むと漁夫が繩を引張つて鵜を舟に引上げて鮎を吐出させてまた鵜を水に入れる。其時分には舟が澤山に出るので篝火が奇麗で勇ましい面白いです。遊山船なども出て夏は大變に賑かです。

一度は是非見たいと思つた。

(九) 養老瀧

大垣で下りて高田町迄は車で、それから一里程歩いて、養老へ行つた。山にかゝると坂が急になつて、櫻が一めんの花さかりで大變に奇麗である。溪流がゴ—くと流れて大きい岩がある。水が岩に衝當つて、白い泡になつて流れる中へ櫻の花がちらくと散り込

んで居る。坂道を登りつめた處が養老の瀧で、凄まじく落ちて居る。暫らく見て居たが水しぶきがかかつて寒い位になつたから、おりに阪の中程の景色のよい茶屋で晝飯を食べた。南の方は一面の平野で、遠方は霞んで見えぬ。

昔し此山に孝行な樵夫があつたが家が貧乏で親の好きな酒を買ふことが出来ぬ。或時岩の間から水が流れて居ると、嘗て見たが酒の味がする。喜んで持つて歸つて父をよろこばせたと云ふ話がある。

と阿父様が仰しやつた。

山を降りて車で關ヶ原に行つて古戰場を見た。こゝは家康が天下分目の大合戦をしたところで、其話は學校で教はつたが、こんな野原かと思つた。

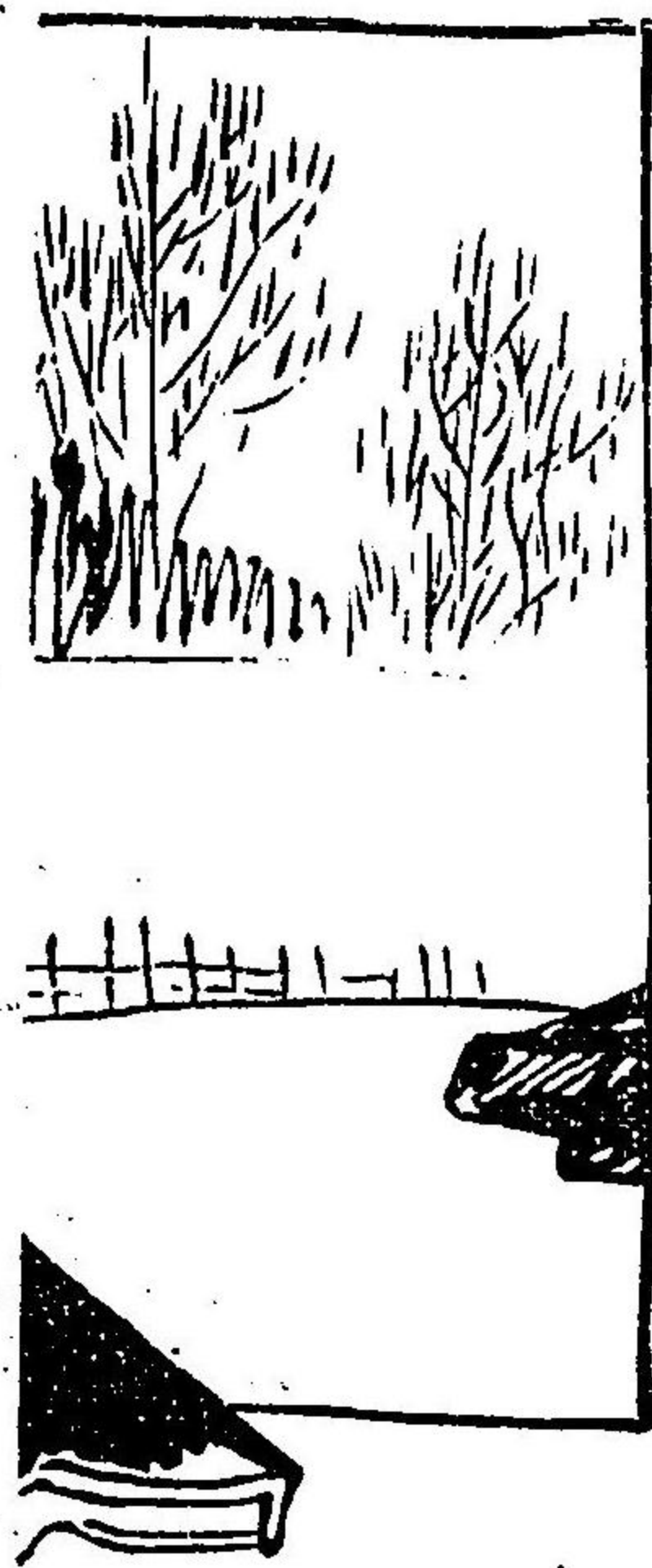
不破の關の舊蹟を見たが小さな百姓家の庭に石碑がいくつも立

つて居て、其家には古い瓦が二ツ三ツある。是れが昔しの關所の瓦だと云つて居つた。

醒井に行つたが小さな寂しい町で、そこに清冽な水が湧出て居る。水の中に平たい石があつて、札が立てある。それには昔し日本武尊が此石に腰をお掛になつたと書いてある。其處から山の間の路を通つて、米原に出て又汽車に乗つた。

(三) 彦根

これから琵琶湖が見えるが、此邊ではまだ一部分しか見えない。蘆の様なのが澤山に生えて居て、其間に漁舟があちらこちらに見える。間も



不

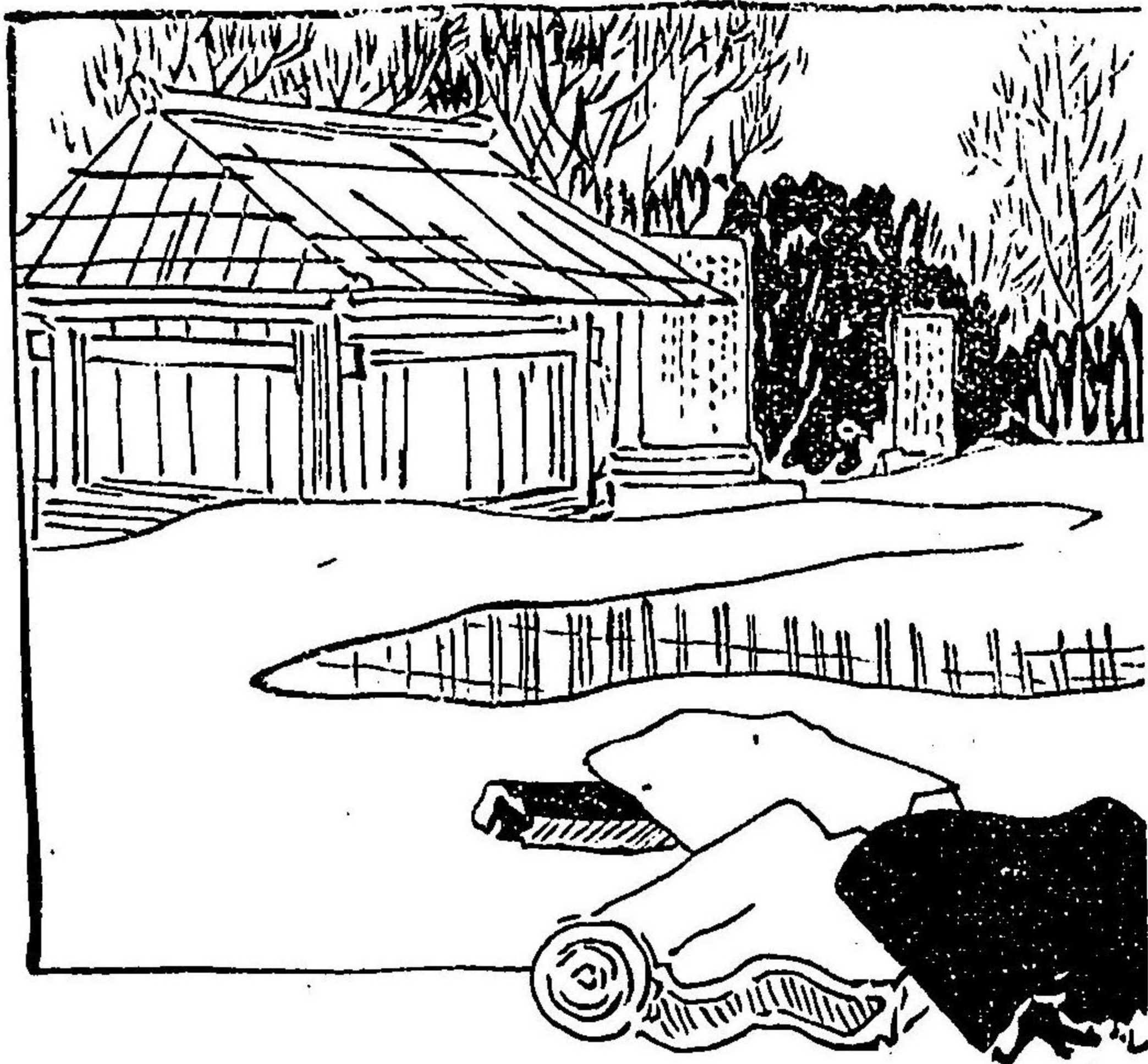
なく高い城が見えた。

『あれは彦根の城で井伊掃部頭の居城であつたがあの邊が今は公園になつて居る。』

『櫻田で殺された井伊直弼と云ふ人は此處に居たのですか』

『さうです、こゝがあの人々の城であつた、あの人は徳川の御大老であつたから江戸に出で、居て今の參謀本部の處がむかし井伊の屋敷であつた。直弼は西洋人の云ふ通り國を開いて貿易を許さうと云つた

破 關



ので水戸の浪人等に殺されたのです。かのヘルリが来てから尊王攘夷の論が大變に沸きましかつたから………尊王攘夷といふのは徳川の天下を倒して、西洋人との貿易を斥けようと云ふ論で、その様な議論で一時は國內が大騒ぎであつたが、とうとう御一新となつて外國との交際も開ける様になつたのだ』

お父様のお話を聞き乍ら、ふりかへつてみると、高く聳えた彦根の城の白い壁は丁度夕日を受けて赤く染まつて居つた。その晩は草津に泊つた。

(二) 關西鐵道

翌朝關西鐵道に乗つて柘植、加太を通つたが、此あたりは鈴鹿峠で周圍の山々は皆蒼々とした奇麗な草山で、谷川が下を緩るく流れて居る間もなく關の停車場に着いた。

「此處は昔し鈴鹿の關があつた處で、今は小さな町ではあるが、諸處へ通ずる道があるので、割合に繁昌な處である。此處には關の地藏と云つて名高い地藏堂がある。又一里程西北へ行くと筆捨山と云ふのがある。これは昔し狩野元信と云ふえらい畫かきが其景色を寫さうとしたが、餘り景色がいゝので筆を投げたと云ふ處である。」

汽車がだんく山の間を出で、眺望が廣くなつた。龜山を通つて津に着て汽車から下りた。

津の町は三重縣廳のある處で町幅は狭いが人通りもあり、店舗がよく並んで立派な町である。海ばたの景色もよい。城跡を見て公園に行たら櫻の花が大分散つて居た。

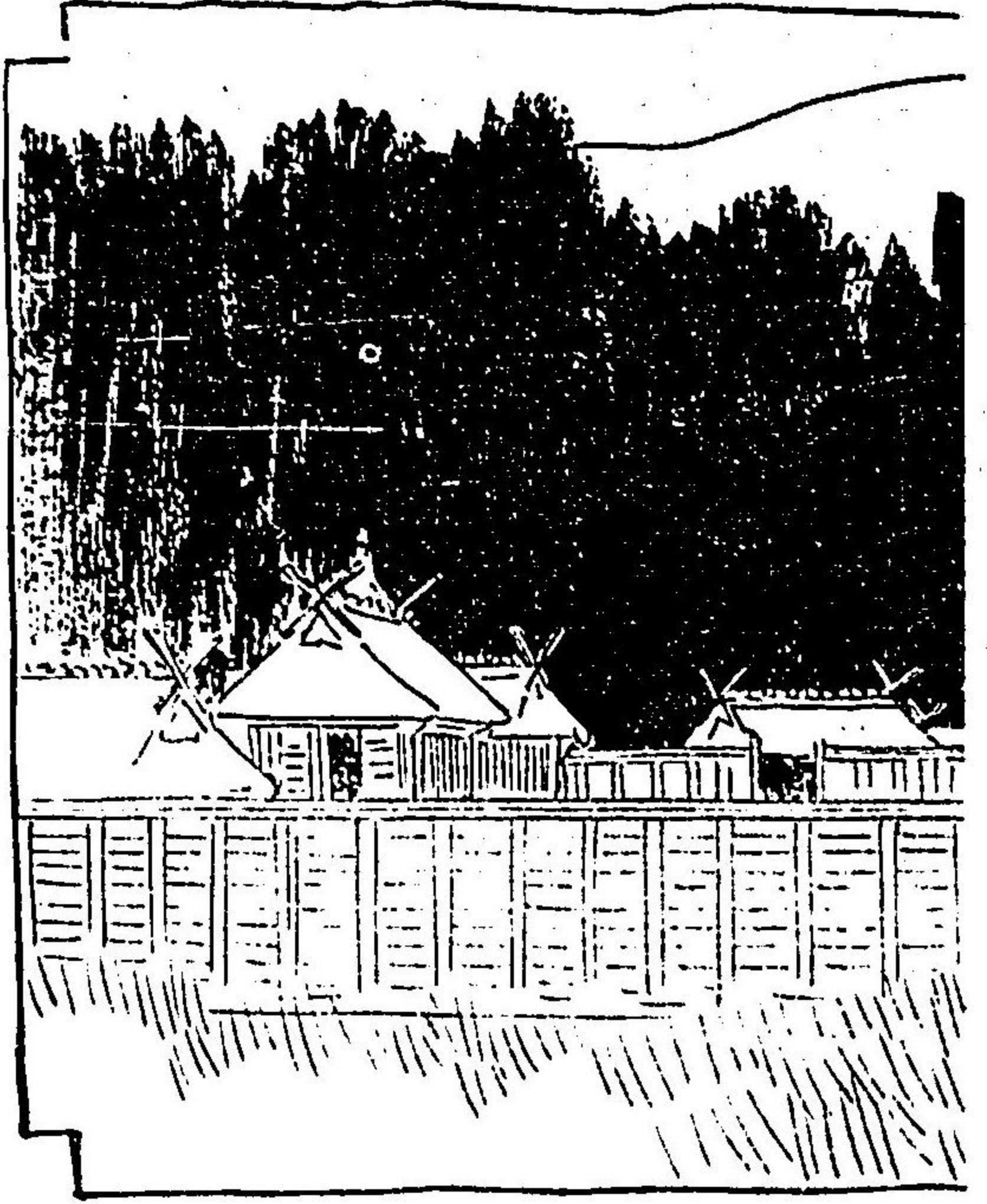
(三) 内外宮

いそいで汽車に乗つて山田で下りて、すぐ外宮に参拜した。
 『お父様、外宮には誰を祀つてあるのですか？』
 『外宮は豊受太神を祀つてあつて瓊々杵尊、天兒屋命、天太玉命などとも一處に祀つてある。』



大

境内は廣く、大木が澤山繁つて居る。町を彼是一里程歩行いて内宮近くなると、いろくくと名物を賣る店があつた。山田細工の箱や篠笛などを買つたが、お父様は東京の土産になさるといつて、春慶塗の箱、宮木箸、紙貫入などをお買ひに



廟

なつた。あちらの店でも、ちらの店でも、『名物をお買ひなさい』と頻りに勧めて居る。こゝを通り抜けると、五十鈴川の橋で、此橋の下には大勢の乞食が傘の様なものを廣げて居る。何かと思つて見ると、人が錢を投てやると、乞食共が一生懸命になつて、其傘みたくやうなもので受けるが、小供も大人も皆な上手に受ける。橋を渡つて右に折れば、それが神苑で、大きい古い杉の樹や松の樹が森々と茂つて五十鈴川の水が淺く、清く流れて居る。何となく心までがサツパリと奇麗にな

るやうにおもはれる。奥深い森の中を進んでゆくと、内宮である。是れが皇太神宮で、我日本國の大廟と云ふのである。お父様は

「大廟は天照皇太神を祭り申してある。その御神體は即ち三種神器の一ツの御鏡である。大昔しは宮中に祀つてあつたが、崇神天皇の時に大和國にお移しになり、垂仁天皇の御世にまた此處におうつしになつたのである。學校の先生から聞いた事があるだらう。」

と仰しやつて祠の前に額づきてお拜みなさつた。私も其通りに謹んで拜んだ。

大きい宮、小さい宮があちらこちらに、澤山ある。

「これから朝熊山に登つてみたいとおもふがお前はあけるけすか。七十丁程あるよ。」

「ナニ七十丁位、いくらでも歩きます。」

といつて、神苑の傍から坂道を上つたが、上つても上つても坂で、中途から大分疲れたが大奮發で登つて、とう／＼頂上に達した。景色のよいこと何とも云へぬ。すぐ下には二見から鳥羽の町が足下に、見えて、海は泉水の様で、向うの山が築山の様に見えた。恰で模型地圖を見る様であつた。双眼鏡で四方を眺めて居ると、茶屋の爺さんが、

「お天氣のよい時は富士山まで見えます。」

と謂つた。

名物の萬金丹を買つて今度は道を変へて、先のよりも細い坂道を下りた。其坂の急な事しかもうね／＼と廻つて石が多いので、膝がガク／＼して大さう困つた。廿町程下りて間もなく、廣い街道に出た。それから一里程歩行いて二見が浦に着いた。後は音無山で前は伊勢灣、濱邊には面白い枝振の松がズット並んで居る。こゝにも貝

細工の店が澤山ある。帆立貝、海松などを買つて少しあるくと名高い二ツ岩が見える。大きな岩が二つ三間計り隔たつて並んで居つて、それに神注繩が張つてある。此岩の間から朝日を拜むと宜いと云ふので方々から朝日を拜みに來る。今夜は二見で泊まつた。翌る朝疾く起きて海岸を散歩した。丁度旭が登りかけてあたりが明るくなつて、波がキラ／＼と光つて居る。

(三) 笠置山

車で山田停車場に來て、昨日の道を柘植まで乗つて此處で乗り換へ伊賀の上野を通つた時、阿父様は『こゝから三里程行けば月瀬といふところがある。月瀬は一面の梅で其中に溪川の流があつて日本第一の梅の名所です』と仰しやつた。

笠置驛で、

『阿父様、この笠置と云ふのは後醍醐天皇の御出になつた笠置ですか』

『其笠置です。こゝから登ると木が森々と繁て居つて峰が高く、谷が深い。山の中に寺がいくつもある。巨大な石が澤山あつて谷をいくつも越えて、瀑のある所を通つて奥の方へ行くと平たい石がある。是れが元弘の亂に後醍醐天皇がお出になつた跡だといふ事である。後醍醐天皇が此處にお出になつた時、河内國に楠木正成と云ふ人が居るといふことを夢に御覽になつて、すぐに正成をお呼寄になつたので、大忠臣の正成公の事はお前も知つて居ませう。何しろ此山に上つて見ると、むかしの事などが彷彿と思出されて、天皇が御心勞遊ばされたことを考へると、覺えず涙が出ます』

私は此御話を聞いて昔のことを考へ込んで黙つて居た。百人一首にある瓶原は此邊りで笠置山の下を流るゝのが泉川であるさうだ。古今集の歌に

都いで、けふ三日の原泉川風さむし衣かせ山
といふいゝ歌があると阿父様の御話であつた。

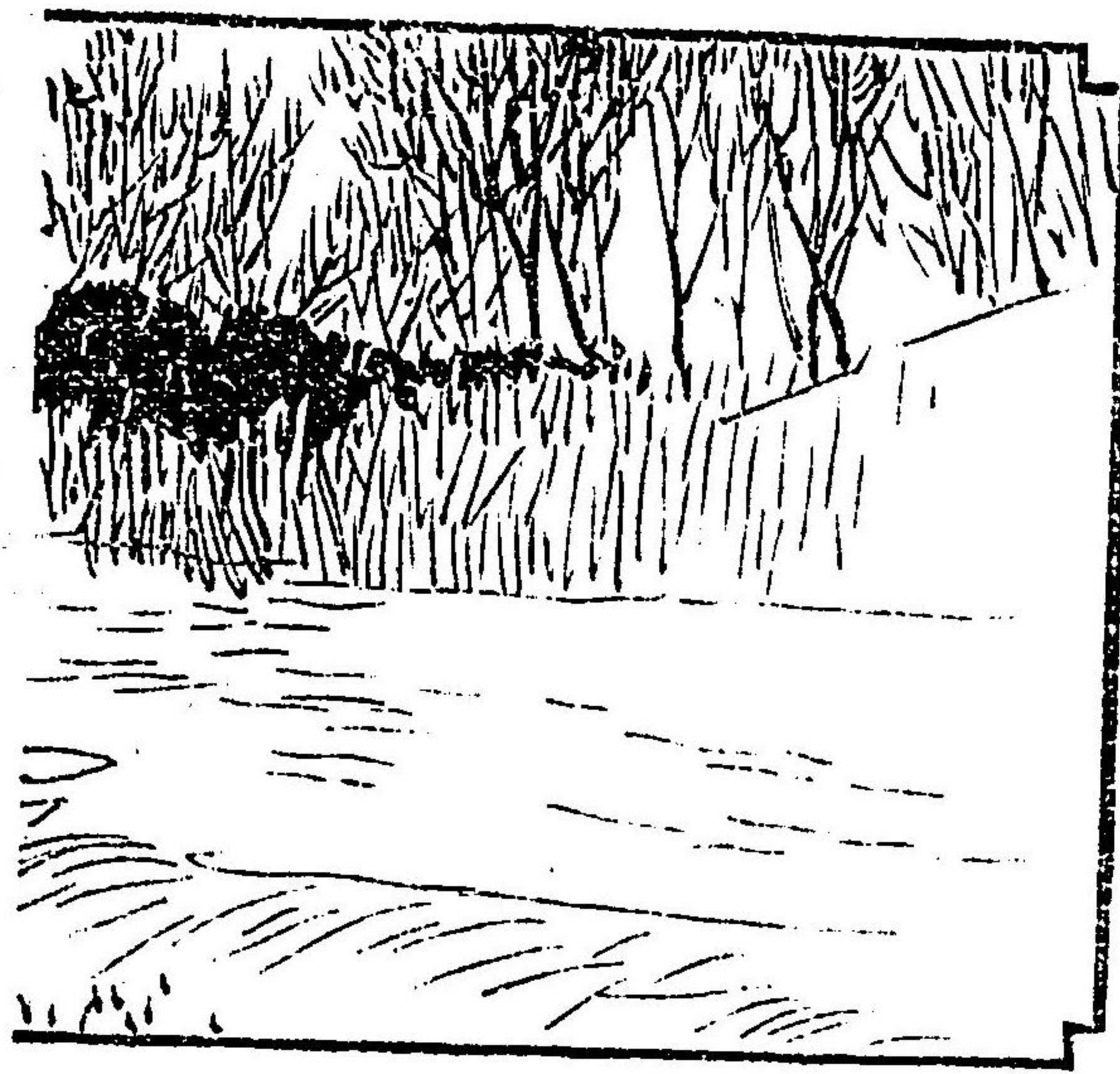
(四) 奈良

奈良でおりてブラ／＼と町を歩行き乍ら猿澤池を見た。餘り大きくは無い。周圍に宿屋などが並んで立つてゐる。左の方には南圓堂と云つて八角の寶形造の堂、北圓堂、東金堂、五重塔などがある。是れは興福寺一名春日寺の残りあとである。此邊は櫻が一面に咲いて居る。此等を見て本通りの道を真直にゆくと、兩側に家が無くなつて、草原で大きな古い杉の樹が道を夾んで立つて居る。其間に鹿が

遊んでゐる。あるいて居るのもあれば、寐て居るものもある。豆腐の粕のやうなものを買つてやると、能く馴れて居るから、手からすぐに喰べる。此道を行き詰めると、そこが春日神社で、並んで居る石燈籠を眺め乍ら赤い樓門に入つた。社殿は朱塗で石壇から玉垣もサツパリとして奇麗である。正殿が四箇あつて、一は武甕槌神、一は經津主神、一は天兒屋神、モ一つは姫神を祀つてある。參拜をすまして、長い廻廊をめぐつて小さな門を出て若宮に行つたが、丁度巫女が白い装束をきて神樂を舞つて居た。

春日神社の上の方に高く聳えて居るのは春日山で、峰が三つある。松杉などが重なりあつて茂つて居る。三笠の山に出し月かもの三笠山は多分此山だらうともいひ、又は其後の方の山だとも云つて能くは解らぬとお父様は仰しやつた。
其次ぎにあるのが嫩草山で、此山には大きな樹は無く、短い草が青

い毛氈を一面に敷詰めた様で、山の形が誠に穩かである。私は獨りで此山に登つて見たが、なかく高い。そして頂上に上つたら後に又た同じやうな山がある。頂上から見下すと、下の道の店や通行人がまるで繪の様に見える。



麓の廣い道には名物を賣る店や、宿屋が並んで居る。そこを通りぬけようとした時、ある店から男が二三人飛んで出て、何とも解らぬことをわやくくと呶鳴つた。何だらうと思つて見ると、刃物を賣る店であつた。這入て見ると、小刀、鉸、庖丁、髮剃、仕込杖の類を並べて名物だから土産に買つていけとすゝ

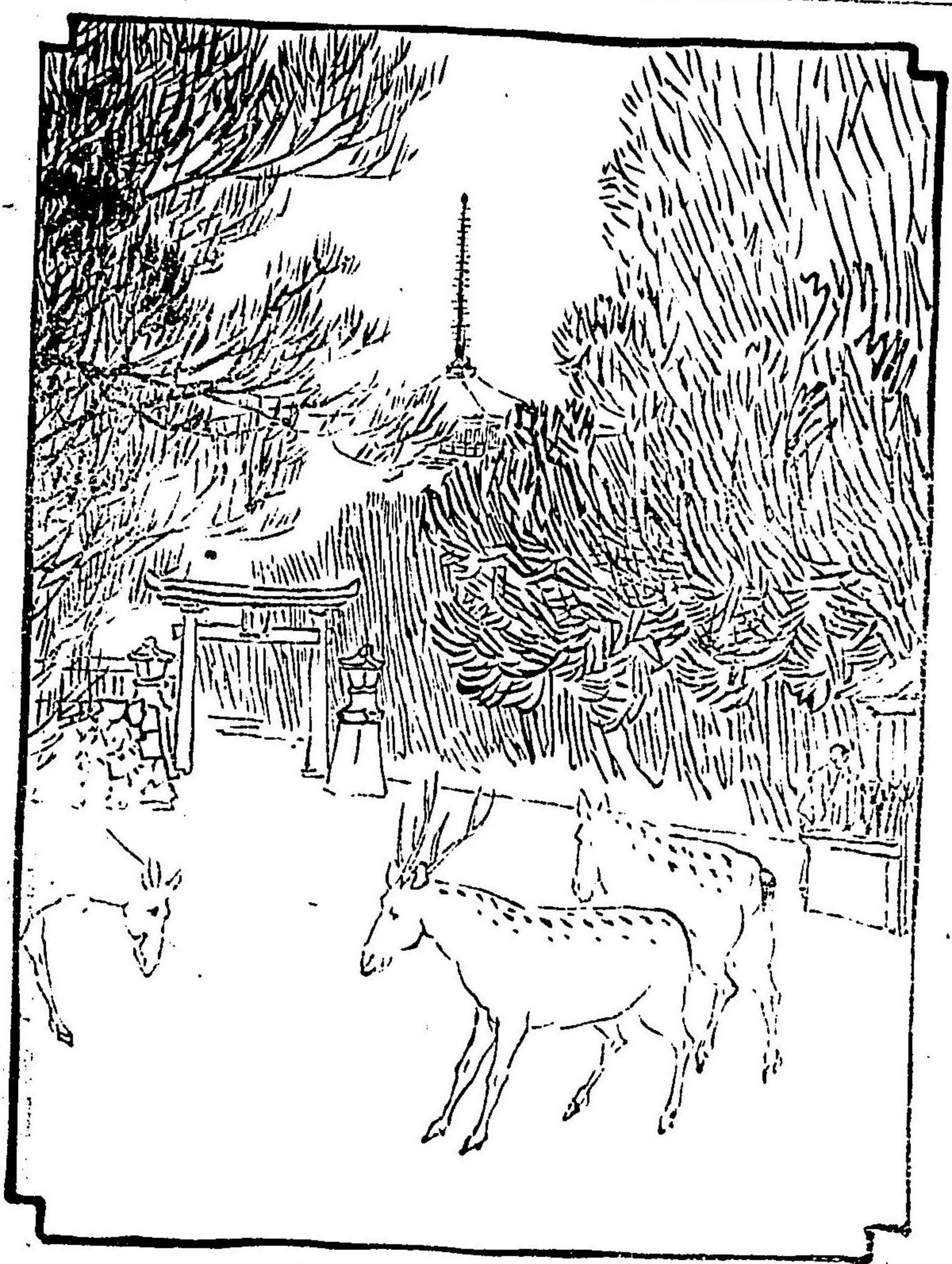


川

少し行くと、そこが紅葉のにしき神のまにくの手向山である。紅葉の時は、殊に奇麗な事であろうと思つた。少し離れて三月堂、その北に二月堂がある。山腹に架けて作つてあつて、階段を登ると、其處が本堂で、多くの人が詣て居て、線香の煙や蠟燭の火焰で、濛々として居る。本堂をめぐつて石段の長い廊架を下りた。見るものがすべて昔じみて居て、珍らしく感じた。阿父様は廊架を下りた處の小さ

める。傍らに藁繩のすだれを釣つた處がある。是は昔しの刀鍛冶の仕事場の模様を示したのだと云つた。

そこを出て、近處の店で名物の春日塗の箱、鹿角の楊子入、奈良人形、あられ酒など種々の買物をして、



社 神 日 春

な建物を
指して、

「これは
若狹井
と云つ
て毎年
舊曆二
月の初
め、二週
間程法
會を勤
めて多
衆の僧

侶達が朝の暗い内から此水を汲んで、此廊架を上るので、それを
二月堂の水取と云つて、其時には諸國から大勢の参詣人があつ
て賑かです』
と仰しやつた。

それから四月堂、是は三昧堂と云つて、普賢菩薩十一面観音、不動明
王、毘沙門天などを祀つてあるが二月堂よりも三月堂よりもモツ
ト小さかつた。

「阿父様奈良の大佛と云ふのはドコにあるんですか」

「モウ少しあるけばすぐ大佛です」
道を回つて廣い静かな松樹などがあちこちにある處を通つて大
佛に來た。これは又鎌倉のよりも大きい。長が五丈三尺餘りあると
の事だがズット見上げて漸々顔が見える位、其わきに小さな佛像
があるが小さいと云つても並の佛様よりはズット大きい。前に

ある蓮華の花を側にあつた竹竿で測つて見たが直徑が六尺もあつたには驚いた。大佛の膝の上で角力が取れるだらうと思つた。堂内をぐる／＼歩行いたがいろ／＼の佛像がある。堂の中にある柱の大きいこと、お父様が柱の向うに居らつしやるとチツトも見えない。

『阿父様、こんな大きな佛様は何時頃に出来たのでせう』
『此大佛は今から千年のむかし、天平十五年聖武天皇が行基といふ豪い坊さんに救し賜ひ、同十八年にやつと出来上つた。其時は熟銅七十三萬九千五百六十斤、白錫一萬二千六百三十八斤、練金一萬四百三十六兩、銅五萬八千六百二十兩を費やしたと云ふことである。其後いく度かの戦争の爲め、殿堂も像の頭も焼けたが時々修復してきた。この堂の後方に正倉院と云つて、天子様のお庫があるが、こゝには結構な御物が納まつてある。虫干の時には

拜觀をお許しになつたこともあるが、其他には決して窺ふことが出来ぬ』

大佛殿を出て路を曲つて來ると戒壇院といふのがあつた。四角な堂の戸を開けて入ると、中央に本壇があつて、四方から上れる様になつてをる。そこには本尊があつて、四隅には人間程の大きさの四天王の像がある。是れはみな名高い彫刻家の作つたものださうで能くは解らなかつたが、お父様は頻に感心して見て居らつしやつた。

其處から又大佛の方に出て、廣々とした路を通つて南大門を見たが、中々大きい門で、其門の仁王様はやはり名人の作つたのださうだ。此邊等は誠にサツパリした、綺麗な眺のよい處で、彼方此方と彷徨て居る間にそろ／＼日が暮れかゝつて、三日月の薄き光りが興福寺の塔のはしに見えて來たから、宿屋にはひつた。

『阿父様、奈良と云ふ處はどうしてこんなにお寺が澤山あるのでせう』

『奈良は昔し元明天皇が都を此處にお定になつてから、桓武天皇が京都へ御遷りになる迄の代々の天子様の都のあつた所で、その時分のことを奈良朝時代といひます。中にも聖武天皇、孝謙天皇など云ふお方々は佛法がおすきであつたから、澤山のお寺が出来た。芭蕉と云ふ人の發句にも「菊の香や奈良には古き佛達と云ふのがある。一體奈良朝の頃には學問でも美術でも中々盛んであつて、山邊赤人、柿本人麿など、云ふえらい歌詠も澤山に出だし、立派な畫かきや彫塑家も出て、この人々の作つた品が多くは此奈良に残つて居るから、今日の美術を研究する人は皆な此處に來るのである。桓武天皇が山城へ御遷りになつても、奈良を南都といつてなかく、繁昌なものであつた。』

とお父様がくは敷話して下さつたので、學校で教はつたことも目のあたりに見える様におもつて、昔の事が解つたよゝな心持がした。

(五) 法隆寺

翌朝汽車で郡山にいつたが、このあたりでは奈良について賑やかな町である。城趾や中學校などを見て、汽車で法隆寺に着いた。

『お父様、これも大きな寺ですね』

『これは大きな計りでなく、一番古いお寺で、元は班鳩寺といつてお堂も五重塔もソックリ昔の通である。』

坊さんに案内されて先づ金堂に入つた。

『阿父様、此佛様は何だかお粗末な妙なものですね』

『是れは本尊の釋迦三尊で古いものだから、氣が利いて居らぬが、』

其不思議な處に面白味がある。かう云ふのは美術の方で推古式と云ふのである。これを御覽、これは橘夫人念持佛で立派な貴いもの、それからこれは玉蟲厨子と云つて玉蟲色だ。是れ等は皆な貴い美術品で國寶といつて日本國の寶になつてゐます。能く氣を付けて見てお置きなさい。壁の畫を御覽、燻つて居るけれども名高い藝徴といふ人のかいたものだ。

寶物は澤山あつたが、九面觀音の像は如何にも上品でいゝ様におもつた。是は聖徳太子の作だと云傳へてあるそうだが實はさうで無いさうである。夢殿には丈の細長い觀音像がある。みな名高いものださうだ。

掃除の行届いた清らかな境内をあちこちと散歩したが可愛らしき小禽が憂々と啼いて居る。

「此處から大和一巡りするのが順だが京都を見ねばならぬから、これから宇治を通つて京都へゆくこととしよう。」

とお父様が仰しやつたから京都を見るのを樂しみにして汽車に乗つた。

(六) 宇治

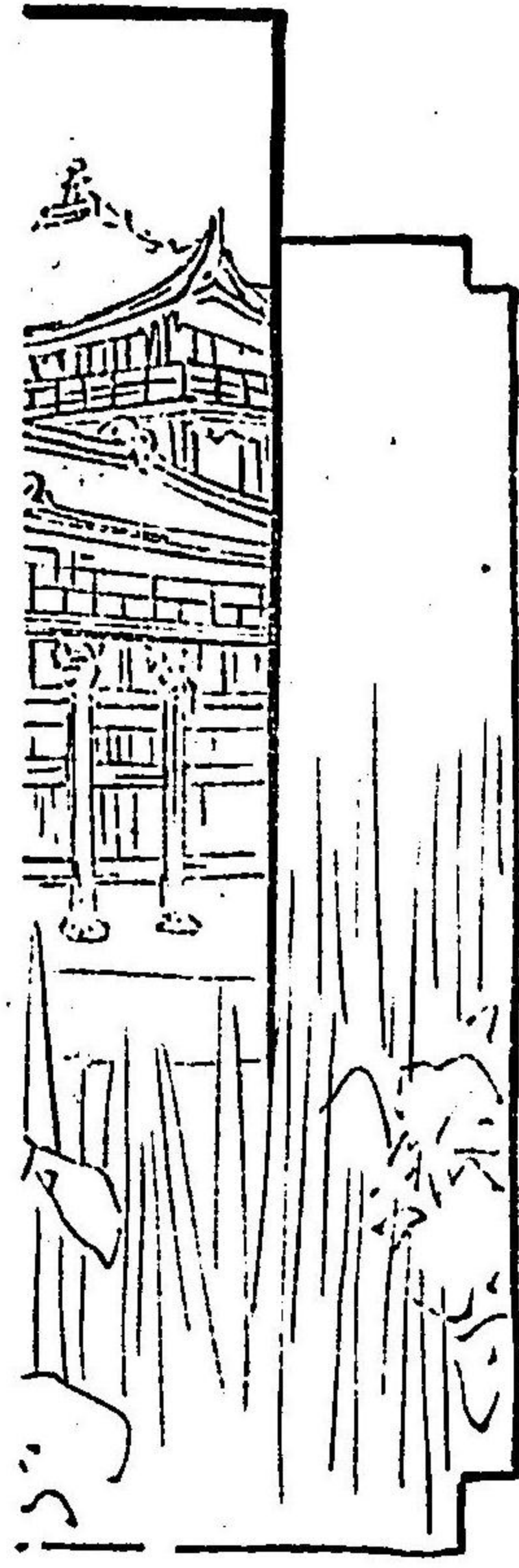
間もなく宇治に着いて町を通つて橋姫祠の前を過ぎて縣神社を見た。これはつまらぬ社で境内も狹いが毎年五月の祭には京都大阪から澤山の參詣人があるさうだ。此社について少しまはると、そこが平等院で、その本殿が鳳凰堂である。

「平等院と云ふのは源頼政が軍をして敗た處でせう。」

とお父様に尋ねたらお父様は委しく話して下さつた。

「平等院は餘程舊いもので、昔は河原左大臣融の別荘であつたが、其後陽成天皇が行宮をお置きになつたこともあり、宇多天皇

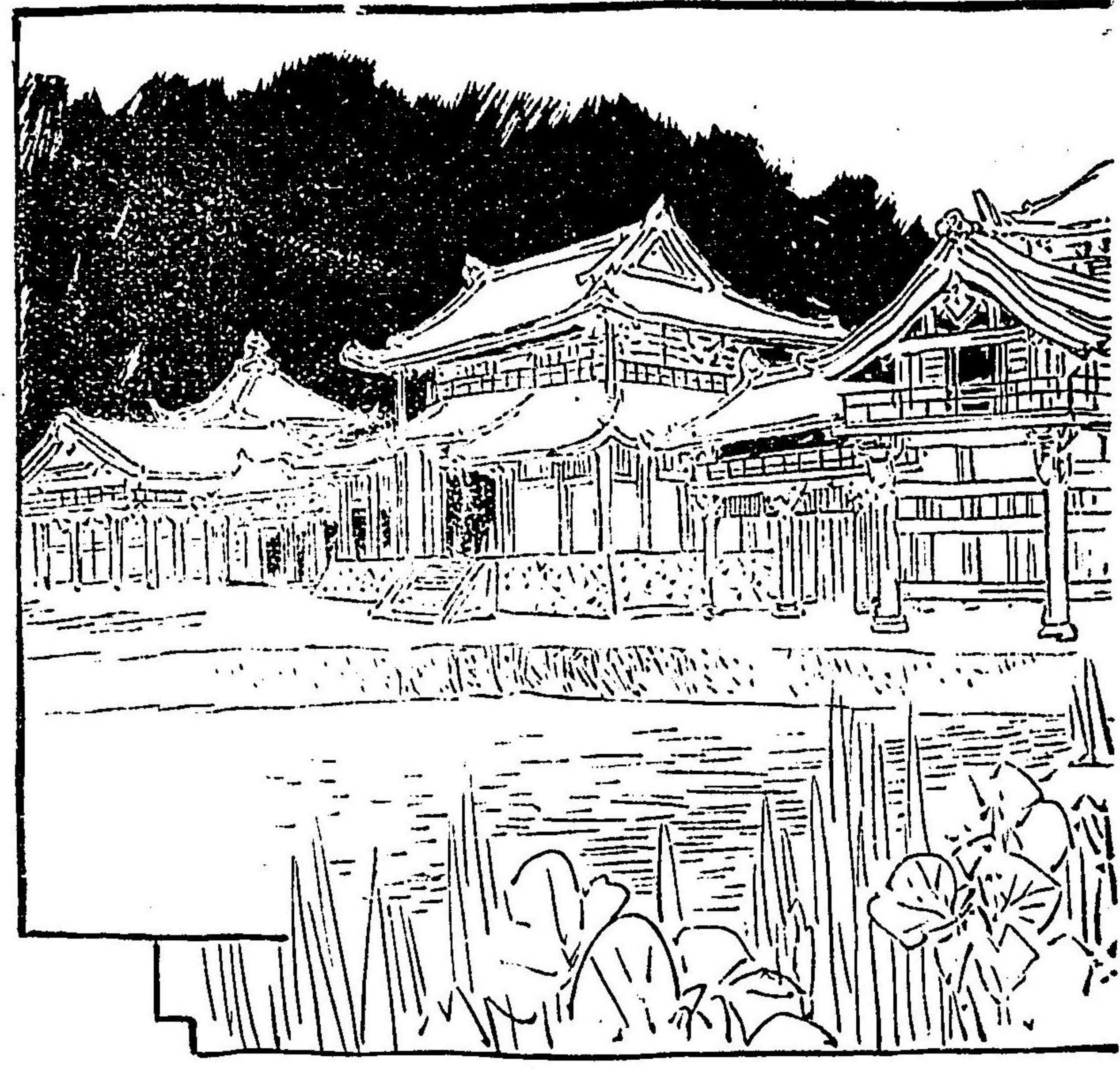
朱雀天皇も離宮とお定めになつたがその後關白道長が自分の別荘にしたのを其子の頼通といふ人が之を寺にして平等院と名づけたのである。今から八百五十年餘り以前の事である。其れから百三十年程経て源三位頼政が後白河法皇の王子以仁王を奉じて旗揚をしたがトウ／＼敗けて此處で死んだので、この鳳凰堂と云ふのは、堂の形も鳳凰が羽翼を廣げた様になつてをり、またあすこの屋根の上にも雄雌二羽の銅製の鳳凰が置いてある。此建築はなかく名高いもので、シカゴの大博覽會にも其模形を出陳したが、大阪の博覽會にも此形を模した茶店があつた。釣殿の前を過ぎて「扇の芝」といふのがある。これが頼政の腹を切つた處。



平

宇治橋を渡つて通圓の店で旭焼を買つた。昔し太閤は宇治橋から川水を汲上げて茶の湯をやつたといふことで釣瓶形の火入などが名物の一である。興聖寺に入つて山を切開いて付けた道を通つて山門に入り本堂で休んだ。曹洞宗で道元和尚と云ふえらい坊さんの開いた

院 等



お寺である。こゝらあたりは杜鵑の名所だそうだ。

「此後方にあるは朝日山で其右に續いて居るのが喜撰岳である。喜撰法師が住居して居た世を宇治山と人は云なりの宇治山は此山である」

とお父様のお話を聞いて喜撰法師はこんな高い山に住んだのかと思つた。

是れから路をかへして川を左に眺め橋を渡らずに、ズン／＼歩いてゆく。ソコ一面の茶畑である。其なかを男女が手拭で頬冠をしたり笠を冠つたりして茶を摘んで居る。これから名高い茶摘みの時節になるのである。何やらわからぬ歌をうたつて居たが田舎道は香氣なもので氣がのび／＼した。暫らくすると誠にめづらしい丁度龍宮の門見たやうなもの、前に來た。お父様が、

「是れは黄檗山萬福寺と云ふ有名なお寺、すべて支那風に出來てゐるから珍しい山門でも本堂でも建築法が悉皆普通の寺とは違ふ。昔し支那から來た隠元和尚といふ人が開いたお寺だ」

木幡から汽車に乗つて、左に巨鯨池を眺めて、暫らくゆくとお父様は右の方を指して、

「あれは桃山で昔太閤の御殿があつた處だが今は跡方も無くなつて茶店がある位のものだ」と仰しやつた。

日が漸々暮れかゝつて左の方には伏見の兵營に灯が見えて夕靄の中から遙かに東寺の高い塔が見え、町が見え、停車場が見えて、

京都京都

(七) 京都……東山

翌朝は疾く起きて七條の橋を渡つて先づ三十三間堂を見た。堂は横に長く舊ぼけたもので桁棟柱などは苔が蒸して居るかとおもふ様であつた。堂の中の暗く細い狭い處を通れば古い佛像がギツシリ一杯に重なりあつて並んで居る。

このお堂の由來をいへば、今から七百七十二年の前鳥羽上皇が三十三間の堂をお建になつて、得長壽院といつて是れに一千一體の観音をお置きになつたが、それから少しあとで後白河上皇が又た三十三間堂をお建になつて蓮華王院と名づけられた。そののち二つともに焼けてしまつたのを龜山天皇が御再建になつて蓮華王院の名だけをお残しになつた。それゆゑ、此建築はモウ六百三十四年もたつた舊いもので、南北の桁行は六十六間あつて二間毎に柱があるから三十三間堂と云ふのである。本尊は千手観音で此澤山あるのは千體の千手観音で皆な運慶湛慶兩

人の作だといつて實に名高い立派なものである。昔は此堂の後に矢を射る處があつて三十三間堂の通し矢といつて有名なものである。

通し矢の話が氣に入つてソコ／＼に堂を出て後方へ廻つてみる、的があつて二三人の人が弓を射て居た。それから博物館に入つたがこれは立派な建物で佛像などが澤山にあつて羅漢もあれば仙人もある、古い書物などもあつたが能く見ることが出来なかつた。繪巻物も澤山並べてあつて昔時の衣装類も様々にならんで居る。グル／＼と一週して北隣りの大佛に行つた。奈良の大佛を見た目には小さく見えたが其釣鐘は名高いもので、

昔し秀頼が大佛供養の爲めに大きな鐘を鑄たところがその銘の文の中に「國家安康」の語があつたので家康が自分の名を二つに斷つたといつてやかましくいつてとう／＼大阪を攻めたの

である。其鐘が今もチャンとあつて一錢出せば誰れでも撞かせる。と仰しやつたから僕も精一杯の力を出してゴーンと撞いて見た。地續きの豊國神社に参拜した。これが秀吉の靈を祀つてあるところ。で何となく昔の事が想出された。大道から見える耳塚は太閤が征韓の役に敵の鼻を斬取つて之を此處に埋めたのだそう。それを鼻塚といはずに耳塚といふのがをかしい。此境内を東に抜け博物館のすぐ後方に當る阿彌陀峰に上つた。石壇がいくつもある。つて之を上りつめると絶頂に太閤の墓がある。大きな圓い墓石があつて。周圍に石の玉垣がある。此峰から見ると京都の町は眼下にあつて。遠くは伏見の邊から後の山科の山續きまでみえて見晴らしが誠によい。

『此阿彌陀峰の墓は五六年前黒田侯爵の發起で大修理をやつて、コンナに立派な石壇や何か出来たので、其時は京都中大騒を

やつて京都の人々が幾日も町中を躍りあるいたのだ。』

とお父様のお話ですべてのもの新らしい譯がわかつた。阿彌陀峰を下りて智積院妙法院など云ふ大きなお寺の前を通つて西大谷に出た。廣い蓮池に架けてある大きい石橋を渡つて大きな門を潜り石壇を登ると本堂がある。橋から内は立派な石で敷詰めてあつて一つの塵も無い。本堂の横をグルリと廻りて裏門を出て狭い道を行くと、そこが鳥部山で一面に皆墓である。行てもく墓計りで、其澤山なのは驚いた。墓が無くなつたかと思ふと、そこが清水の観音であつて高い石壇を上つて山門を通り振り返つて京都の市から西山を見渡し、本堂に入つて大きい丸柱を撫で、本尊の前に出た。お父様が、

『此寺は崖に凭て建て、あるので一部分は高い臺になつて居る。此處を俗に舞臺といつて昔時は観音に願を懸けて此舞臺から

數十丈の下へ飛びおけるといふ事があつた。此舞臺に立つて眺めたが、近い青い山は目の前に衝立ち右の方には遠い處がボンヤリと霞んで見えた。

「阿父様、此寺の出來たのは餘程古いのですか。」

「古いとも大變に古い。今から千百年前大和小島寺の僧延鎮と云ふのが坂上田村麿と相談して此地に北觀音寺と云ふを建て其後平城天皇が紫宸殿を田村將軍に賜はつて之によつて造つたのださうな。併し今のお堂はその時では無い。」

奥の院に行つて繪馬堂の御朱印船の圖を見た。徳川時代の船はこんな形のものかと珍らしく思つた。石壇を下りて舞臺の下に出たが、細い水が二條落ちて居る。これが音羽の瀧といふ瀧である。それから山道を進んだが、其邊が歌の中山と云ふので、其奥に清閑寺といふお寺がある。如何にも其名の通り清閑で深々とした山のあはひ

で人も通らず唯だ鳥の聲が寂しく聞えた。六條天皇高倉天皇の御陵があつて、其側に小督局の墳もある。またもとの道を歸つて清水觀音の境内に來て眺望の宜い茶屋に休んだが、其茶屋には「忠僕茶屋」と云ふ看板があつたから何だらうと思つて阿父様に伺つたら、阿父様は委敷お話しして下さつた。

「西郷隆盛の僕に重助といふのがあつた。西郷がこの清水の成就院あすこにみえるあの成就院の住職の月照と懇意で、この人も勤王家であつたから始終一しよに色々相談をして居たが、むづかしい事があつて西郷と月照と二人で月の晩に舟を薩摩灣にこぎ出しそこで身を投げた。其時傍に居た重助は大に驚いて兩人を救上げて介抱したが、西郷だけは蘇生つて、月照はトウく蘇らなかつた。それから重助は始終西郷について居つて、西郷が死んでからこゝに住居して、ふたりのあとを吊つた。それがこ

の茶屋である。重助ははやく死んだが、あすこに肥つた婆さんが座つて居る、あれが重助の婆さんだ。近年成就院の門内に重助の石碑が出来て有志の人が此の「忠僕茶屋」の看板を贈つたのである。

茶屋から見おろすと、下は谷間で櫻の木も少しはあるが、多くは楓樹である。紅葉の時節にはさぞ奇麗だらうとおもはれた。境内を出て、清水坂をあるく。兩側に清水焼の名物を賣る店が並んで居る。阿父様は右傍の小さな堂を指して。

「これは經書堂といつて、謠曲の平宗盛清水參詣の處に出て居るので名高いものだ。」
と仰しやつた。此堂の横から急な坂道を降りて、産寧坂から靈山に行つた。寂しい處を歩行いて行くと、墓が澤山ある處に出たが先づ第一に「吹けや錦の旗の手」の歌で名を知つて居つた平野國臣の

墓をみた。おもひの外小さかつたが、其外維新時分の豪い人達の墓が澤山並んで居た。しまひに木戸公の墓があつて、こゝを下りて高臺寺の境内に出で、日清戦争の紀念碑の前を通つて高臺寺に入つた。

「此寺は慶長年間太閤の夫人北の政所が居られた所で太閤陣中に用ゐた鍋釜碗の類がある。」
と阿父様のお話を聞きながら廊架の石壇を登れば、時雨の亭、傘の亭があつた。此等は有名な茶人千の利休といふ人の工夫して拵へたのださうで、大さう雅致があるとお話であつた。奥殿には太閤と北の政所の木像があつて、庭は廣くは無いが泉水や松の木なども大變物寂びて居る。寺を出て石壇を下りて、高臺寺焼を賣る店で茶碗急須などを買つた。
それから道を南に取つて八坂の五重塔がある。朱塗も剝けて哀れ

にみえたが山の半腹にあるので見はらしがい、それからまた南に向て珍皇寺に出た。本堂は薬師如来で左と右に地藏菩薩と小野篁の像がある。本堂の脊に篁堂があつて前面には閻魔堂がある。高さ七尺許りの石地藏は法弘大師の作だと云ひ傳へて居る。此寺の境内にはむかし小野篁が生きた地獄に往來した路があつたと云傳へて居るさうである。珍皇寺の前の通りを六道の辻と云ふ。こゝを横ぎつて六波羅密寺に詣つた。此寺はなかく大きくて舊い。昔时空也上人が十一面觀音の像を刻んで此處に安置せられたといふ。

こゝから道を西に取り、廣い通りに出で、北に折れて建仁寺に行た。境内は松樹が多く、池には石橋が架てをつて、池中には龜が澤山に居た。南の黒門昔し平重盛の邸にあつた門だと云ふ。摩利支天は宋の清拙和尚が持て來たと云ふので高さ七八寸で金色七頭の獅子

に騎て居る。

『禪宗五山といつて京都に禪宗の大きなお寺が五ツある。これはその一ツで昔土御門天皇の御願でたつて源頼家が敷地を寄附した。そして建仁三年に出來上つたから建仁寺と云ふのである。』

此境内を通りぬけて安居金毘羅がある。中央に崇徳天皇を祭つて北には金毘羅南には源三位頼政を祀てある。お父様は

「これは桓武天皇が都を當地にお定めにならぬ前からあるので舊いものだ。大織冠鎌足公がこゝに藤を植ゑて家門長久を祈つたとも云ふ。崇徳天皇が度々お出になつた事があつたので、天皇のお崩になつたあとで本社を造營したのである」

とお話になつた。こんなものが其様に舊いのかと思つた。それからさつきの高臺寺の下の路を通つて北へ双林寺、芭蕉堂を見た。此邊は眞葛ヶ原と云つて、双林寺の境内に屬してゐる。サツパリ

とした静かな處である。秋になると萩が澤山に咲いて奇麗ださうである。小さい哀れげな石塔が三つある、一つは西行法師、一つは平判官康頼、モウ一つは頓阿法師のである。

「お父様此三人はどう云ふわけですか、に並んで居るのですか」
 「西行は昔此寺内に閑居して居たことがあるし、康頼は此處の風景が氣に入つたと云ふので山莊をこゝに拵へて居た。この人は俊寛僧都など、一處に鬼界ヶ島に流され、後赦されてから再び此地に住居して寶物集と云ふ書籍を書いたと云ふ話。又頓阿法師は双林寺に住んでその歌は草庵集といつて名高いものだ。さう云ふ譯で此三人は互に關係は無いがこの地には皆な近い關係がある」

此處を横ぎつて東大谷に出た。これは廣い石壇を上つて山門に入り、右に折れると廣々とした處にお堂がある。本堂の上の方に開祖

親鸞上人の廟があつて、なかく立派である。古い樹が森々と茂つて苔が青く蒸して居る。

北方の横門を出て右に進んで長樂寺に上つたが本堂は以前焼けてしまつて今は唯小さな建物がある計り、其處の山道を草を分け乍ら上ると、京都の町を見下す風景のよい處に山陽先生の墓がある。お父様は、

「お前は山陽先生の名を知て居ませう……山陽先生は今から六七十一年前の學者で、京都に住んで居られた。先生の日本外史、日本政記などは世間に知らぬものゝない名高い書物で、以前はどんな人でも皆な讀んだもので、其書物にはかの勤王の意味を含んでかいてあるから、御一新の世となつたのにはおのつと大功があつた。それで明治になつてからは位を贈られました。此先生は外の學者の様に遊戯半分に詩や文を作つて楽しんで居たの

では無く、深い考から日本の歴史を研究して、大變に勉強をした人です。井伊掃部頭の時分に國の事にて奔走して殺された頼三樹三郎と云ふ人が先生の三男です。

と色々お話下さつた。

此處を降りて圓山公園に入つた。一番高い處にあるのは温泉で其近邊にはホテルやら料理屋などがある。少し下つた廣い處に、一本の大きい櫻樹がある。是が名高い祇園の夜櫻と云ふので、もはや花が散て居たがそれでもなかく賑やかなことであつた。ダラくと爪先下りに西に行くと、祇園の社で此處もなかくの人出である。此社は八阪神社と云つて素盞烏尊を祀つてある。

毎年七月十七日から一週間は有名な祇園の祭禮で、京都一番の賑やかなお祭である。町々から奇麗な飾をした山鉾を曳出すので、なかく立派なものである。

見たいなと思つたが夏だと云ふから仕方が無い。こゝをおりると四條大橋であるが、これは後まはしにして、隣の智恩院にいつた。境内には、高い大きい松の樹が日光を遮つて、石壇の上に大きな山門がある。こんな大きな山門は初めて見たので如何にも驚いた。下から見上げると莊嚴で崇高く見える山門をはひつてまたいくつもの石壇を登ると、大きな本堂の前に出た。本堂の根屋の上には處々に佛像を置いてあつた。右側の檐にふるい傘が一本さしてある。如何にも不思議なものだと阿父様に伺つたら、

あれは智恩院の傘といつて名高いもので、この建築が餘りに立派で少しの隙が無いから、魔除の爲めにわざとア、してあるのだと云ふ話である。

と仰しやつた。

小僧に導かれて奥へゆくと廊下がキウくと音がする。これが鶯

のなく様に聞えるといふので鶯張りの椽側といふ襖の畫などは狩野何々と云ふ、どれもく立派な繪師のかいたものであつた。本堂を出て、東南方の小高い處に鐘樓がある。これは西洋までも知れ渡つた巨大なもので高さが一丈八尺、直徑九尺で厚さが九寸五分ある。一通りの撞木では本當の音響が出ないさうである。前年皇太子殿下が行啓になつた時、之をお撞かせになつたが、殷々として四圍の山谷に鳴り響いたので、大層御感があつたと云ふことである。本堂の下通を北に向つて行くと、粟田口の青蓮院である。此寺は維新の頃までは宮様が御座りになつて居て、由緒のある、立派な寺であるが、前年本堂が焼けて、其後再建になつたものである。寶物はなかく澤山あつて珍らしさうなもの計であるが、一番氣に入つたのは走り大黒といつて、二尺計の大黒が大きな袋を脊負つて立つて居るのであつた。泉水に緋鯉が泳いで、池の周圍は奇麗な芝

草が一面に青々として居る。茶室は舊いもので、樹が茂り合うて居る中に静かな趣があつて、こんな處で勉強してゐたらよからうと思つた。

青蓮院を出て三條通を横ぎり、右に折れてズット行くと、水力發電所がある。門をはひつて入口から覗いて見ると、大きな車輪が廻つて居て、幅の廣い帶草がいくつもく流れる様に動いて居る。その前に船が車に乗つて水の無い阪道を上下して居た。

「阿父様一體これは何ですか。」

「京都の疏水とて名高いものだが、琵琶湖から運河を通じて此上の蹴上と云ふ所に出て、それから水は山に沿うた水道を走り、舟は車で此阪道を下り、下の……アレ、あすこの水のある所まで持て行くのである。此阪を英語でインクライン、即ち傾斜道と云ふのである。」

そんなら其船に乗つて琵琶湖まで行けますか。それではいつか乗つて見たいとおもひます。今乗つて見たいと思つたけれども、そうはいかないから、お父様に
ついてゆくと、道の兩側は松樹ばかりで、向うの山も青く、道も青く、
風も青かつた。

『此道の突當りが南禪寺で昔し山陽先生の句に、

逢人休問南禪寺、一帶青松路不迷、

とあるのは此處のことだ』

とお父様のお話を聞き乍ら南禪寺に着いた。

山門はやはり大きい智恩院のにも負けまい。昔し石川五右衛門が
此山門に居たといふ話もあるとの事である。本堂は焼けて無いが、
奥殿があつて、其横の池の瀧には夏の頃随分人が出て来るさうで
ある。右の山腹に疏水の水道がある。石と煉瓦とで高く積み上げて

山の腹に沿うてうねくとして頗る宏大なしかけである。此水道
の下を潜つて石壇を登れば、龜山法皇の廟で、舊い樹が茂つて森閑
とした庭に鳥が寂しさうに啼いて居る。其前を疏水が非常な勢で
流れて居る。南禪寺の境内を北に通り返つて田舎道がある。いて永
觀堂に行つて境内の池を一周した。こゝも楓樹が澤山にある。その
次が若王寺の社もとは寺であつたが、今は神社で熊野權現を祀つ
てある。秋は紅葉が美しいとのことである。

山麓の寂しい路を歩いて鹿ヶ谷に出た。

昔し俊寛僧都、藤原成親、平康頼などの人々が清盛入道が餘り我
儘勝手な事をするから之を滅さうとして相談したのが此邊で、
モウ少し山に上ると談合谷といつて俊寛僧都山莊の舊跡があ
る。

成程と思つて山を見上げて居ると、お父様は

『あれは如意ヶ嶽といつて毎年七月十六日には大の字形の火を現はすので大の字山とも云ふ。其字は餘程大きいもので遠くから奇麗に見える。これも京都の名物の一つである。』と仰しやつた。

間もなく銀閣寺の門を入つた。玄關で案内を頼んで小僧につれられてグル／＼と一周したが、一々小僧がいつてきかせた。銀閣寺は足利義政の居つた所で、寶物も澤山にある。室々の懸軸襖又は屏風などはどれもこれも名高い書いたものである。東求堂と云ふのが將軍義政の持佛堂で、義政の像と觀音の像とがある。東の端に奇麗な茶室があつて、これが四疊半の茶室の嚆矢である。と云ふ事で、其中にいろいろの寶物がある。庭は石や泉水などで奇麗に作つてあつて、其石は諸國の大名から献上したもので、畠山石とか細川石とか一々名が附いて居る。奇麗な細かい砂を積んだ

のが銀砂壇と云ふ。銀閣は庭の隅にあつて閣上からは東の峯から月の出るのが能く見える。誠に静な奥深いところ、如何にもよい處であつた。銀閣寺を出て、田圃道を通つて眞如堂に行たが、ズット石を敷詰めた路があつて門をはひると、境内はなかく／＼広い。本堂の外には善光寺如來堂、元三大師堂、地藏堂などがある。一まはりして黒谷へ行たが、これは金戒光明寺と云ふ名であつて境内も大さう廣く、山門も大きい。智恩院の山門ほどにはないかも知れぬが、なかく／＼大きい。本堂の前に熊谷の鐵懸松がある。此松は高くはないが、枝と枝とが重なり合つて低く廣がつて居る。此寺は熊谷直實が一の谷の合戦のあとで、此處へ來て坊主になつた處である。本堂に入つて寶物を拜觀したが、廣い室がいくつもあつてソコにいろいろの珍らしさうなものをズラリと並べてあつた。お父様は感心して見て居られたが、能くは解らなかつた。本堂を

出て左の石壇を降り小さい池の橋を渡ると、墓場になる。墓場に入るには十段も廿段も石壇を登るのであるが、その石壇の右の方に熊谷と敦盛との墳がある。其前には熊谷堂があつて、こゝに熊谷や敦盛などの木像がある。石壇を上つて、墓所に入つて左に折れて墓石の間をゆくと紫雲石といふのがある。周囲は松林で町を離れて居るから如何にも静閑で松風の音と線香の匂との外には何も無い。

「お父様此石はなかく大きいよーですが何だつてこんな石に堂が建つて居るんですか」

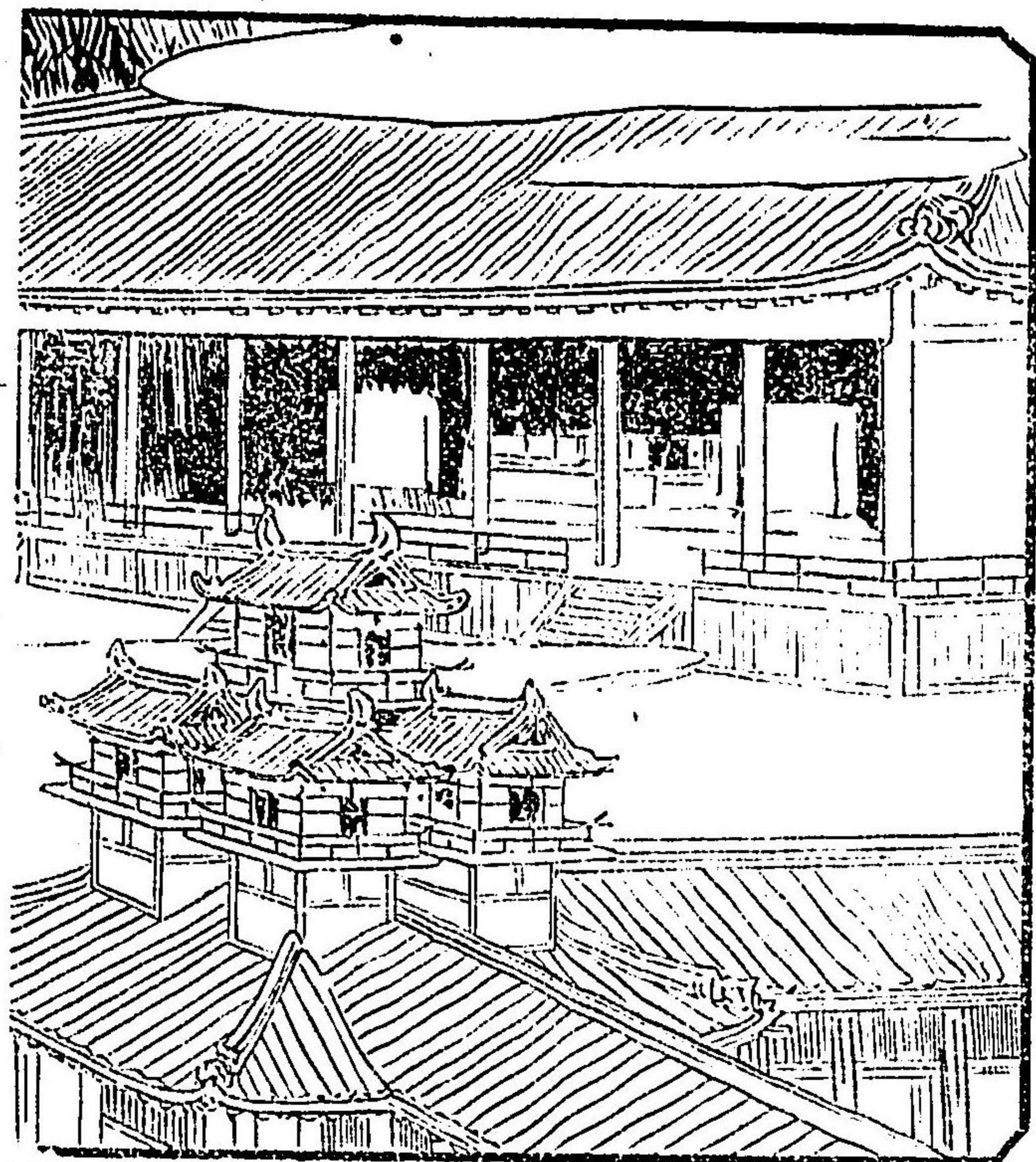
「これは昔し法然上人といふ僧さんが居て、其人が此石の上に座つて佛法の道理を考へた。幾日もくさうして居る内に大に深い道理を悟つて胸がカラリと開ける様に感じた。其時にどこからと云事もなく紫の雲が襲襲て珍らしい宜い香氣がしたと云

ふので、紫雲石と稱へて居る。法然上人は浄土念佛の教を立てた人でなかくえらいひとである。えらい人はみな勉強するものである。

それから元の道を歩行いて三重塔を見たが、是は文珠師利を祀つてあつた。

黒谷を出て二十分間程歩行いて神樂岡に上つて吉田神社に参拜した。官幣大社で武甕槌神、経津主神、天兒屋命を祀つてある。境内も廣く社殿も壯麗であるが、人が餘り來ないので極めて静かである。神樂岡を下りて右の方に出来ると、京都帝國大學があつて、其前が第一高等學校で西隣が高等工藝學校である。高等學校の南隣に府立第一中學校がある。此邊は一體に吉田町と云つて學校ばかりあるので、學生が買ひさうな物を賣る小さな店があちこちにある。日も早や西に傾いてきたから歸路に就くことにして、醫科大學の

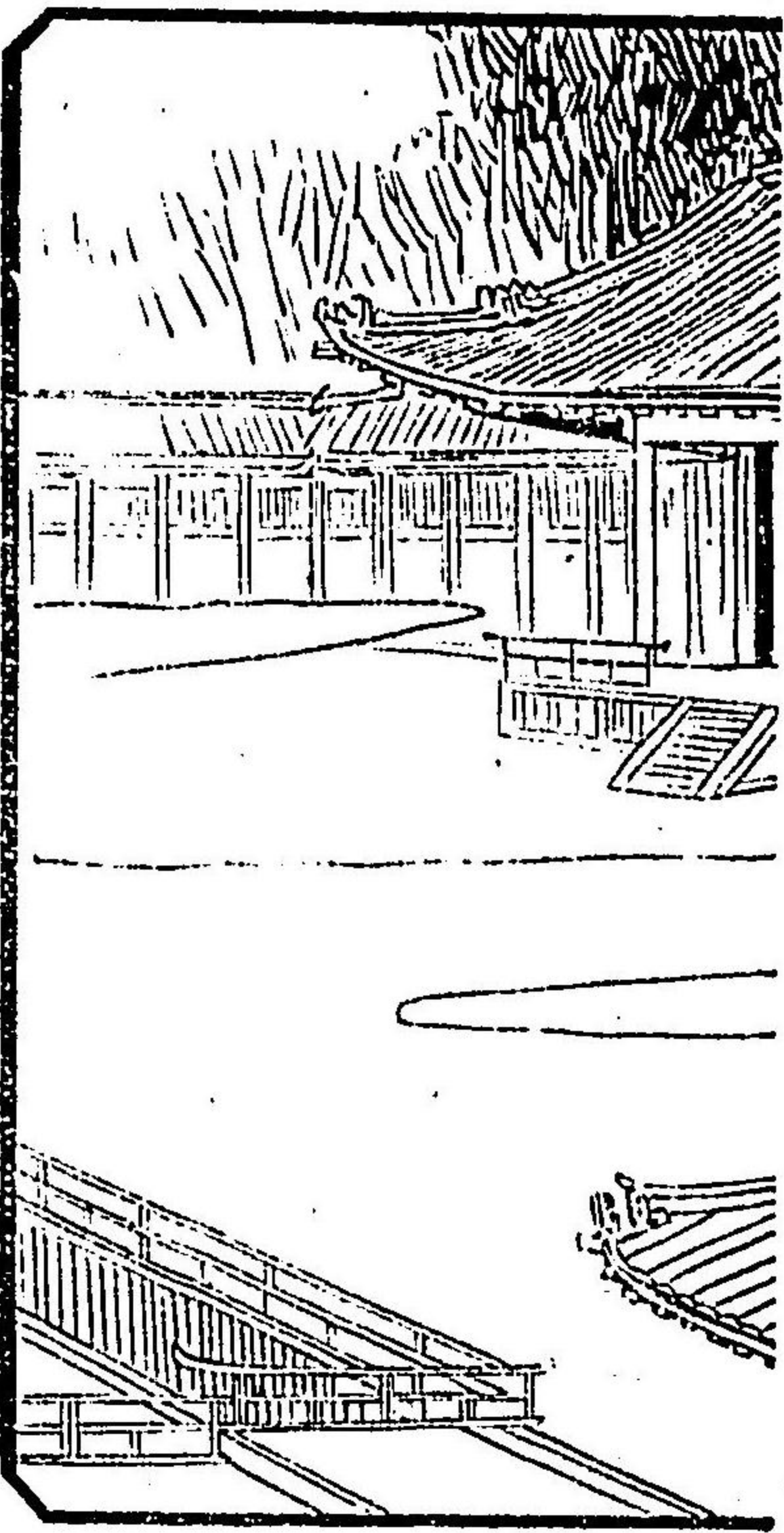
病院の横を通り左に折れ右に折れて大極殿の處に來た門も本殿もみな朱塗で屋根は青瓦葺であつて如何にも奇麗で境内が廣々



大極殿

として居るからまことに心持のよいところである。

「阿父様大極殿とはどう云ふ譯ですか。」
「是は平安神宮と云つて桓武天皇の尊靈を祀てあつて官幣大社で昔しの大極殿を模して造つたものである。明治廿七年に出來



行はせられたところであつて桓武天皇が平安京を御定めになつた時最も骨を折つて御造營になつたのがこの大極殿で、一番立派で一番奇麗であつた瓦は皆な碧で柱などは丹塗、それに種々の飾があつた。その後度々火災で焼けてしまつて、それからは大禮などは紫宸殿や清凉殿で行はせらるゝ様になつた。その大極殿にならつて今此處に造つたものであるから、世間ではやはり大極殿と云つて居る。青い瓦に赤い柱など昔しの通りで誠に

「た」
「昔しの大極殿といふのはどう云ふものですか」
「大極殿といふのは、代々の天皇の即位の御儀式をはじめ朝廷の大禮を

奇麗である。こゝは毎年四月卅日に大祭がある。成程と思つて眺めておると後の方は吉田黒谷から聖護院の森遠くは比叡山から東山一帯に青々として西にみえるのは愛宕山で、どちらをむいても良い景色で、神殿の碧い瓦、丹い楹、丸でむかしの繪をみる様におもつた。日が丁度西山に沈みかけて居たので金銅の鷗尾は一層輝いて居た。疏水の橋を渡つて鴨川に沿うて三條通に出たこれは昔しの大通りで大津から都に入る街道であつたさうだ。大橋の唐銅の擬寶珠に昔しの大名の名を彫てあるのを見て宿に歸つた。

『今日は東山を一巡したから、大分疲れた、お前も疲れたらう』とお父様の仰せに、

『ハイ大分疲れしました。しかし面白い處ばかり見てきましたから、そんなにも思ひません。京都は本當にいゝ處です。』

お父様は莞爾とお笑ひなまつて、

『お前も京都が氣に入れたのかい。今夜は京都の歴史を話して聞かせよう』

と仰しやつたからそれを樂みにお湯に入つて御飯をすました。お父様はお茶を召し上り乍ら、

桓武天皇が延暦十三年十一月に長岡の京から此山城國葛野郡に御移りになつてから平安京と云ふことになつたが今年まで丁度一千年になる。その時は羅城門市坊など皆それ／＼規則をお定めになつて誠に整然とした立派な都であつた。左京右京と別れて、兩方とも同じ様な造り方になつて居た。其間に寺だの宮だのも澤山に出來て段々と繁盛になつてきたが、丁度其時分は藤原氏が權を専らにしてなか／＼盛んな時であつて種々贅澤華奢な風が起つて來た。さうかうして居る内に藤原氏も衰へて

源平の士どもが強くなつて頼朝が鎌倉に幕府を開く様になり、皇室の御威勢も弱くなつてきて、都は衰へて追々寂しくなつた。その後應仁の亂——お前は應仁の亂と云ふのを知つて居るか。應仁の亂と云ふのは足利義政の時に細川勝元と山名宗全との争で、何しろ十一年も續いた大戦で、町はみな焼けて宮も寺も悉皆焼けてしまつた。さすがに繁華であつた都も荒れて寂しくなつた。なれや知る都も野邊の夕雲雀あがるを見てもおつる涙は」と云ふ歌がある通り、ひどいものになつてしまつたのである。それから信長秀吉の時代には又々追々と恢復して、元の様に賑かになつたが、徳川の時代には始終江戸に壓へられて、トモ江戸には及ば無つた。明治になつてから、博覽會があつたり記念祭があつたりして、今の様に繁昌になつたのである。それで千年餘りもたつた都であるから、名處舊跡なども澤山あり、風景もよく、ソシ

テ賑やかだと云つても東京や大阪に比べれば至て静かな處であるから、今は遊びにくる者が大へんに多いのである』と話をして下さつたので、非常に面白かつた。

(六) 御苑……西山

翌日早く起きて窓を明けると昨日歩行いてきた東山が颯々と青く續いて、蒲團きて寝たる姿や東山といふ句があつたことを思ひ出した。其中に塔が一つ赤く見える。八坂であらう。先づ御苑に行つたが、廣々として瀟洒とした奇麗な所に小さな松が何千となく植わつて居て、道は石一つ無い様に奇麗である。車が通つてもおともせぬ。あちらこちらと歩行いて見たが、何處へ行くも同じ様で廣いものである。つゝしんで皇居を拜んで、それから東南の方にまがれば仙洞御所

である。此御所に就てはお父様は、

「仙洞御所は昔しからあつたのだが、應仁の後はすつかり荒れてしまつて徳川の世になつて改めて御造營になつた處が其後三度も焼けてしまつた。併しお庭は其儘にあるのでこれは誠に結構の御庭で築山といひ泉水といひ實に見事なものである。いろいろ珍らしい形の石の間を水が浅く流れて居るなどは如何にも見事なものである。」

と話して下さつた。

御苑を出て鴨川にかけてある葵橋を渡つて下加茂神社へ行つた。木が澤山に茂つてお社はすつと奥にある。この宮は加茂御祖神社と云つて官幣大社である。毎年四月に葵祭といつて立派な祭禮がある。この葵祭は欽明天皇の御代に創まつたものであるとお父様から聞いた。今でも昔しの通りの行列があつて競馬もあるさうだ。

葵橋を渡つてすぐ糺の森と云つて非常に茂つた中に小河が流れて居る。夏はさぞ涼しからう。

鴨川の堤を半里程溯つて、上加茂に行つたが、こゝにも古い御宮がある。此宮は加茂別雷神社と云つて桓武天皇以前からある古いものであるさうだ。

また、さつきの御苑を通つて電車に乗つて、北野天満宮へ行つた。菅原道真公を祀つてあるので、名高い天神様。さすがに社殿も立派で廻廊には澤山の金燈籠がつるしてある。廣い境内をあちこちと歩行き乍ら裏門から出て平野に行つた。是は官幣大社で日本武尊仲哀天皇、仁徳天皇、天照太神、天穗日命を祀つてある。境内は一面に櫻の木で懸茶屋もあつて、頻りに「お休みなさい」と勧めて居つた。廣い道を北の方へゆくと金閣寺である。

「是は東山の銀閣寺と一對のものであるが、足利義満が金閣を築

いて、鹿苑寺と云ふ小寺にしたのである。』
 とお父様のお話をきながら這入つて見ると銀閣寺などよりす
 つと大きい。それに庭の廣いこと、大きい池には島があるやら、岩が
 あるやら、誠に珍らしい。船の形にした松の樹があつて、後へゆくと
 瀧がある。丘の上に亭があるが、其南天樹の床柱と胡枝花の達棚と
 は有名なものである。

廣い田圃道を一時間程歩いて妙心寺の裏門から御室の仁和寺に
 行つた。如何にもよい道で、四方の景色が一體によい。圓い饅頭見た
 やうな衣笠山やら、雑木の生茂つて居る双ヶ岡、恰と繪を見るやう
 であつた。この双ヶ岡は徒然草をかいた兼好法師の居たところだ
 とお父様の御話であつた。

仁和寺は昔し宇多天皇、朱雀天皇が御住になつた古い寺で、故の小
 松宮様がここに居らせられた名高いお寺である。

山門は赤塗で其上にいろくな色の飾がある。

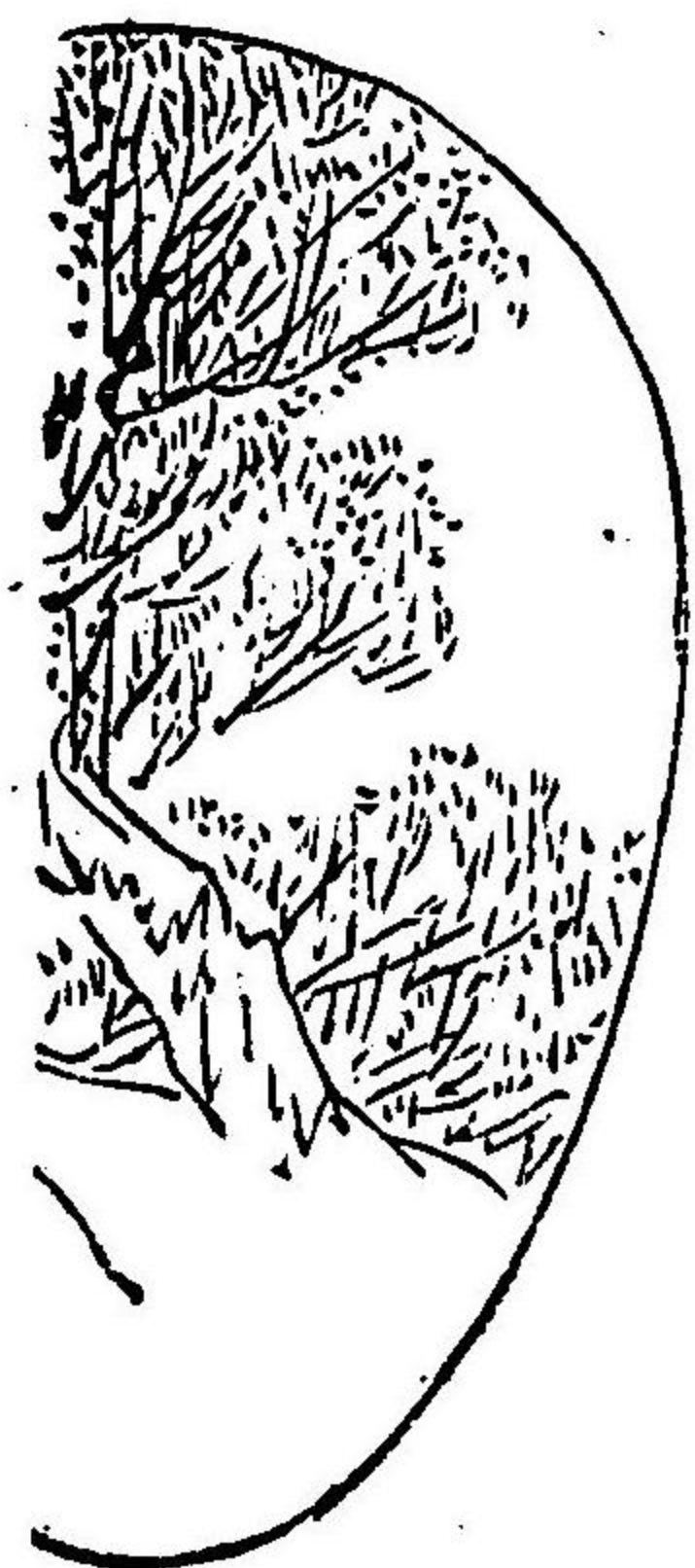
山門を潜ると、櫻が一面にあつて金堂、観音堂、祖師堂、五重塔、法親王
 舊殿など多くの建物がどれもく立派であつた。

山門の前の茶屋で一休して、そろく嵯峨の方へ歩み出した。廣
 澤の池、大澤の池など、大きい池の側を通り、人里離れた静かな道を
 歩行いて大覺寺に出た。

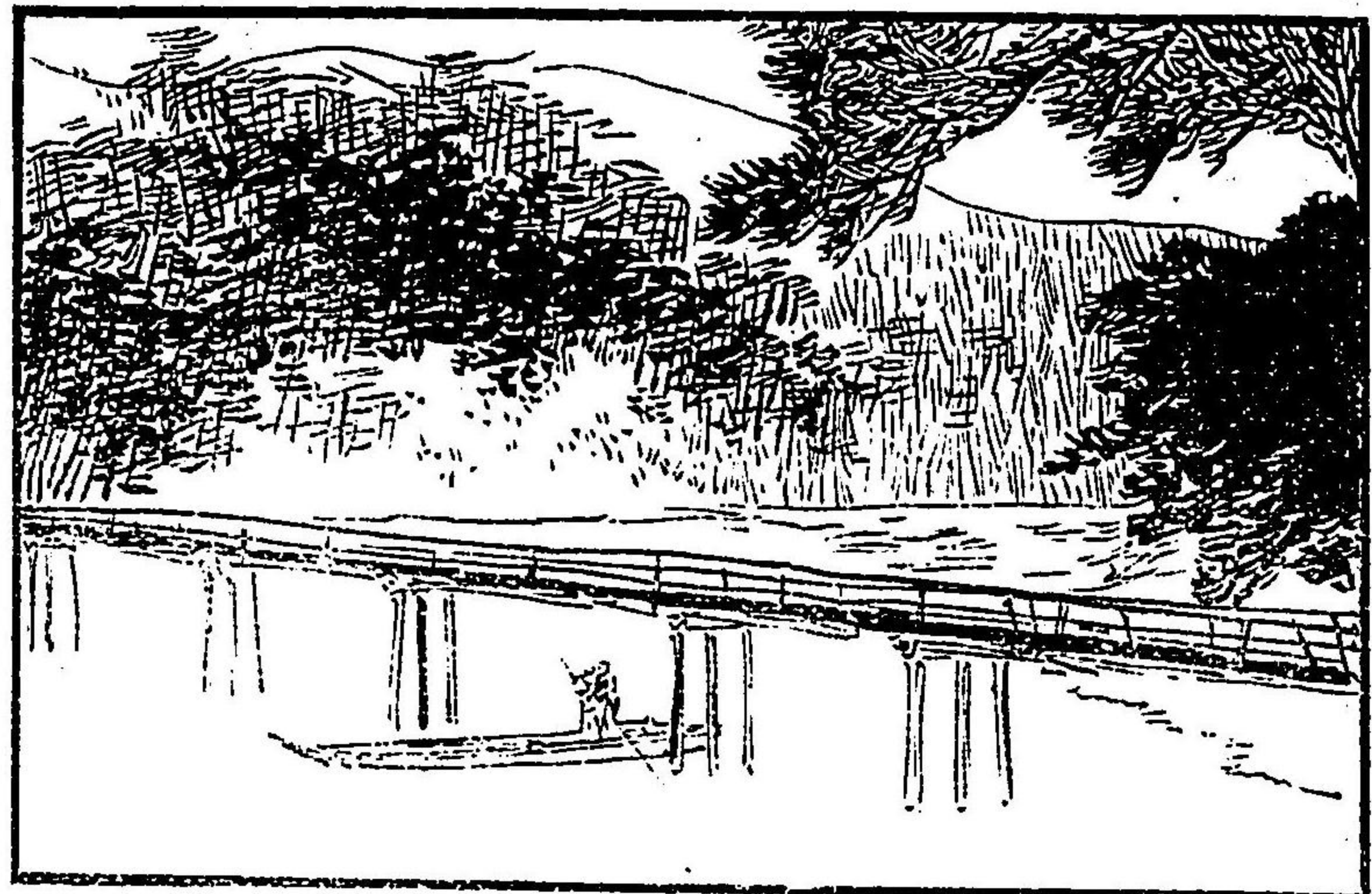
これはもとは嵯峨天皇の離宮で、後ち淳和天皇が寺になされても
 つと大きかつたのだらうが、今は荒れてこの通り草叢が茂つて居
 る計りである。ソレカラ嵯峨の釋伽堂(清凉寺)を見て、其山門の恰好
 の好いのに感心した。

天龍寺の前あたりへくると、路を夾んだ大きい松の樹が互に枝を
 交して路の蓋をした様になつて居て、路側には茶屋があつて大き
 い赤い提燈に「花より團子」と書いてあるのが面白い。これが渡月橋

で、川の向は有名な嵐山である。橋のこなたには茶屋料理屋などが
 並んで居て、其邊に渡舟があつたから、それに乗つた。お父様が、
 「此川は大堰川と云ふ名で下流へゆくと桂川と名が變る。丹波か
 ら流れてくるので上流は保津川と云つて非常な急流である、そ
 して奇岩怪石が兩側や川の中に横はつて中々險呑な處もある
 さうだ。之をむかし角倉了以といふ人がきり開いて船の通ふ事
 が出来る様にした。そこを舟で下ると大變によい景色であるが、
 併し随分奇險いこともある。あの筏を御覽、あの通り材木や竹を
 編んで筏にして丹波の方から下つてくる。』
 と御話になつた。角倉の話は學校でも聞いて居つたから



成程とおもつた。舟に乗つてゆるく進んで山の景色を見るに、赤松が一面に茂つて居る山の



花の山二丁
 のぼれば
 大悲閣

六月や峰に
 雲おく
 あらし山

麓の細い道には時々人の通るのが見えた。松の青々とした間に残りの櫻がちらほらと赤く見えて、其下に水は碧々濁まいて流れて居る處々淺くなつて底の石も數へられる位の場所もある。大きい牛の様な石が幾つも横はつて居る處に舟が着いた。そこに嵐山温泉がある。温

泉の前に坂道があつて麓に嵐山二丁登れば大悲閣と刻た石碑が立つて居て、是れから急な坂を曲りくねりして登ると小さな奇麗な大悲閣があつた。見晴らしのよい處である。閣の左側には角倉了以の碑があつた。此處を下りて温泉で一休みして、又舟に乗つて向岸に着き、小さな憐れな小督墳を見て、嗟哦の停車場から汽車で歸つた。

夕方から散歩して四條大橋を見て新京極を通つたが、うつくしい店賑やかな觀世物、東京の淺草の様な賑やかさであつた。

(元) 比叡山

翌朝夜の明けぬうちに車で白川まで行つて、比叡山に登つた。坂道を二里あまり上ると、根本中堂で大きい舊い寺が森閑として、一人二人の坊さんが居る。大講堂や辨慶水などいふものを見て、四明嶽

に上つた。四明は比叡山の一番高い峰で草計りで木が無い。右の方に山城の國がスツカリ見え、京都の市は眼の下にあつて、左は琵琶湖から遠方の山々も見える。愛宕山も向うに小さく見えて自分が高い天空に登つた様な心持がした。風が蓬々と吹いて來て雲が脚の下から湧き上る。覺えず

「お父様、何だか遽かに大きくなつた様です」

と叫んだ。低い小さい石室の中に寂しさうに座つて居る石像を何かと聞いたら、それが傳教大師だとのこと。

山の下りかけに松杉の間から琵琶湖を見下ろすと、廣い疊の様な水の上を可愛らしき汽船が通つて居るのは丸で繪の様にみえる。

(三) 琵琶湖

坂本へ下りて、小蒸汽に乗つた。唐崎の松を右に見て大津に着いて

三井寺にはひつた。森の中を通つて行くと辨慶の曳すり鐘がある。辨慶が力に任せて曳すつたと云ふので鐘にはその痕が付いて居る。あちらこちらに古い寺のあるのを見て左へくへ行て観音堂に上たが琵琶湖の景色はこゝからもみえて大津の町が直ぐ下に

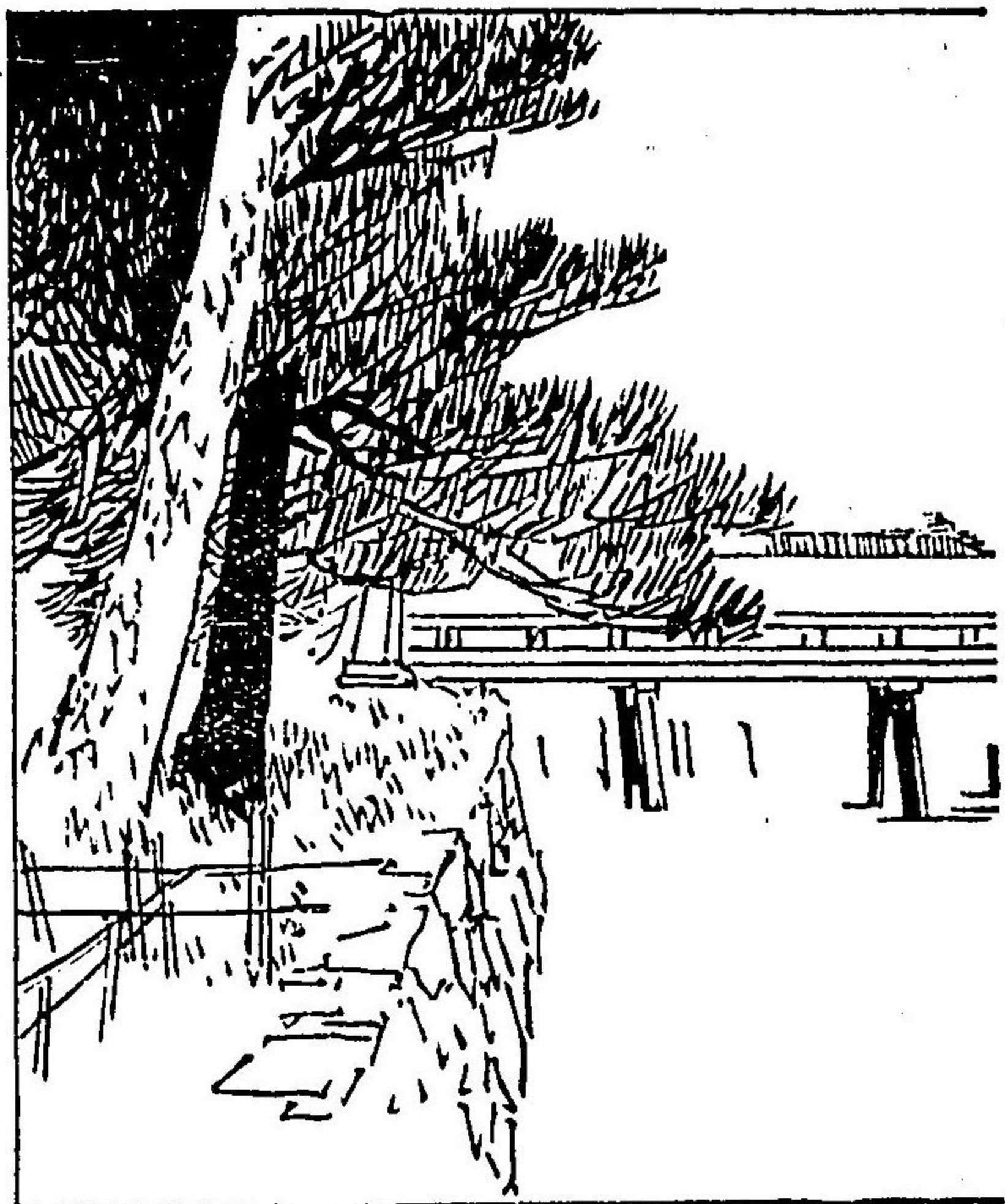


ある茶屋に休んで名物の力餅を食べて石段を下り大津の町を通り越して膳所から栗津を通して木曾義仲が討死したのには此邊であらうか杯と思て居ると阿父様は『今井兼平の墓はあすこにある』と右の方を指さされた。名高

眺めて景色のよい處である。

『お父様、近江八景と云ふのはどこです』

『近江八景は皆な此湖水のほとりにあるのでさつき通つた唐崎の夜雨、三井の晚鐘、矢橋——これは膳所のあたりの湖邊である、其



湖

い勢多の橋を横に見て石山寺に着たが、成程石計りである。何でも石を切り啓いて其間に寺を建てたものと見え

る。

観音堂には紫式部が源氏物語を書いたと云ふ室があつた。本堂も寶塔も極古いもので月見亭は湖水のあたりを

矢橋の歸帆、粟津の晴嵐、あすこの勢多の夕照、此の石山の秋月、比良の暮雪、堅田の落雁、これが近江八景である。」

石山停車場から汽車に乗つて、少しゆくと隧道に入つた。

「この山は逢坂山といつて此隧道の上に關所のと、蟬丸の舊跡などがある。これやこの行くも還るも別れては知るも知らぬも逢坂の關と云ふのは此處である。」

とお父様から聞いて、懐かしく思つた。暫らくして京都停車場を過ぎ、山崎合戦の古戦場は此邊でもあらうかと思つて居る内に、

(三) 大阪

に着いた停車場の大きいのは驚いた。電氣や瓦斯の光りがきら／＼として、車や人が澤山に通る賑やかな町々を通つて、宿屋に着いた。

「大阪は大へんに賑やかな處のやうですね」

と言つたらお父様は

「大阪は昔浪速の津といつて神武天皇御東征の時分から名が知れて居て何處からくるものでも必ず此處を通るので、天下の中心であつた。三韓支那と交通する様になつてから、殊更に外國の船などが出入する様になつて、肝要な土地となつた。仁徳天皇は此處に都をお定めになつて、中々繁昌であつたが秀吉が此處に居つた時分から、一層大切な處となつた。川が澤山あつて交通の便も多く商業も我邦では一番盛んで、人口も五十萬以上ある」と詳しく話して下された。

翌朝梅田に行つて、西成鐵道に乗つて、築港の見物に出かけたが、何をしてゐるのか能くは解らぬのでお父様に尋ねた。

「大阪の灣は本當の港と云ふことが出來ぬので、今之を立派な港に

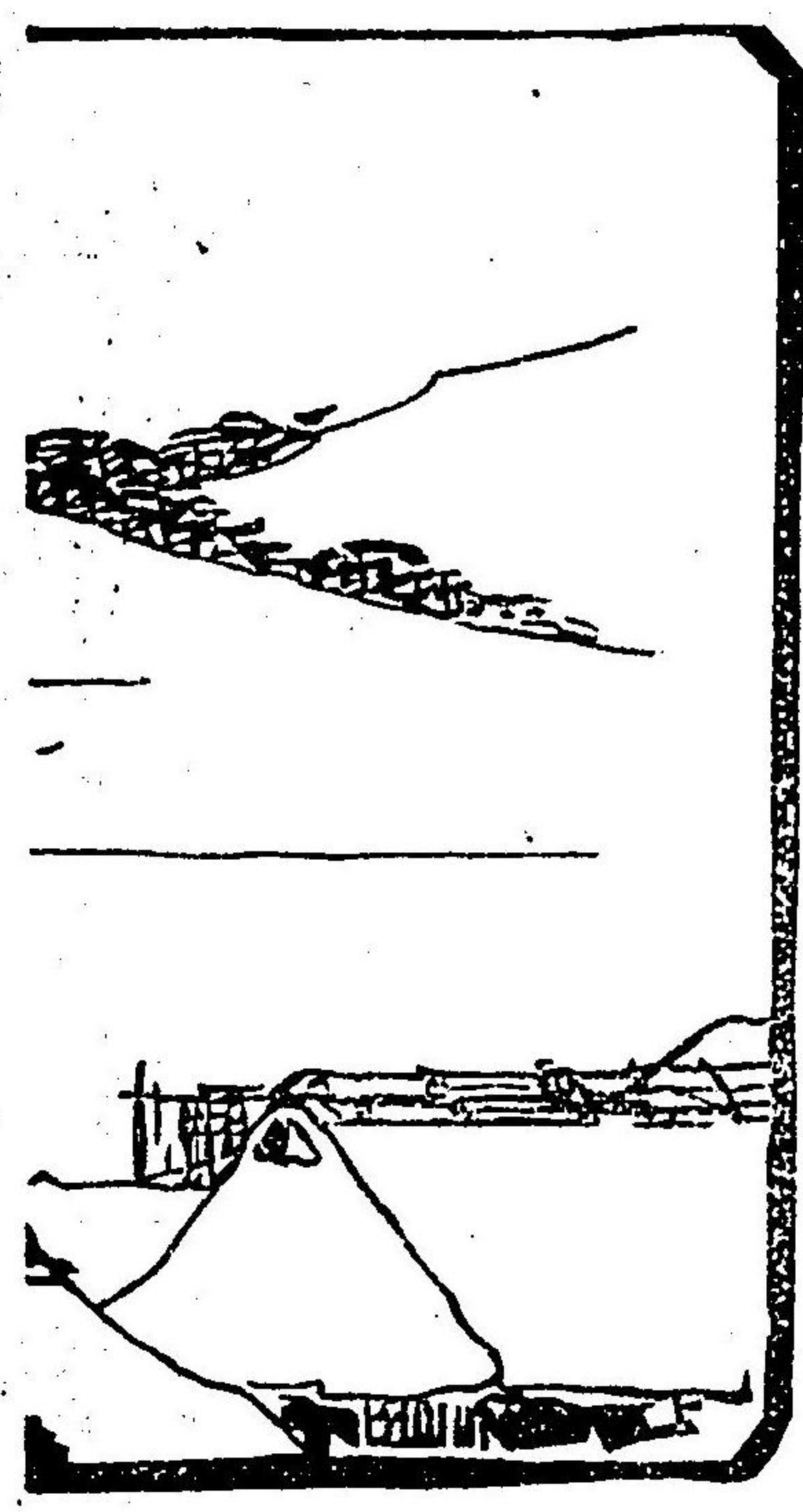
しようと云のである。ズット廣く防波堤を拵へ大きい棧橋も作り、ドンナ大きい船でも自由自在に這入ることが出来る様にする計畫で、水の底に石を埋めて、それをコンクリートで固める。西洋では港は皆立派に出来て居るけれど、日本ではまだ本當の港と云ふものが無い。大抵は皆自然の儘である。此築港がいよいよ出来上つたら通商貿易の上に一層便利になるであらう」と仰しやつたが何しろ廣い海の事で悉しい事は解らなかつた。それから車で、町をうねりくねりして澤山の橋を通つて、大きい肥後橋と云ふのを渡ると、そこが中之島公園である。公園と云ふけれども、格別公園らしくも無く、小さな木が植つて石などが少し並べてある位のものであつた。そこには豊國神社もあり、大阪ホテルもあつて皆立派である。周囲がすべて大きい川で水がゆつたりと流れて居る。東京の隅田川よりは奇麗である。大阪には無暗に川が澤

山あるのに驚いた。どこへ行ても川と橋がある。

浪華橋を渡ると天神橋で、是が大阪第一の長い鐵橋で中々立派である。右に折れて大阪毎日新聞社の前を通つて、道頓堀に出たが大變に繁華な處で芝居が澤山にある。其横が千日前といふので寄席や見世物が並んで居て丁度淺草公園の玉乗の近邊の様におもはれる。少し行くと名高い四橋がある。これは川が十字形に流れて居る處に四個の橋梁が架けてあつて丁度井字形になつて居る。橋は皆小さな木造で、何でも無いものであるが、四個相對して居る形が面白い。

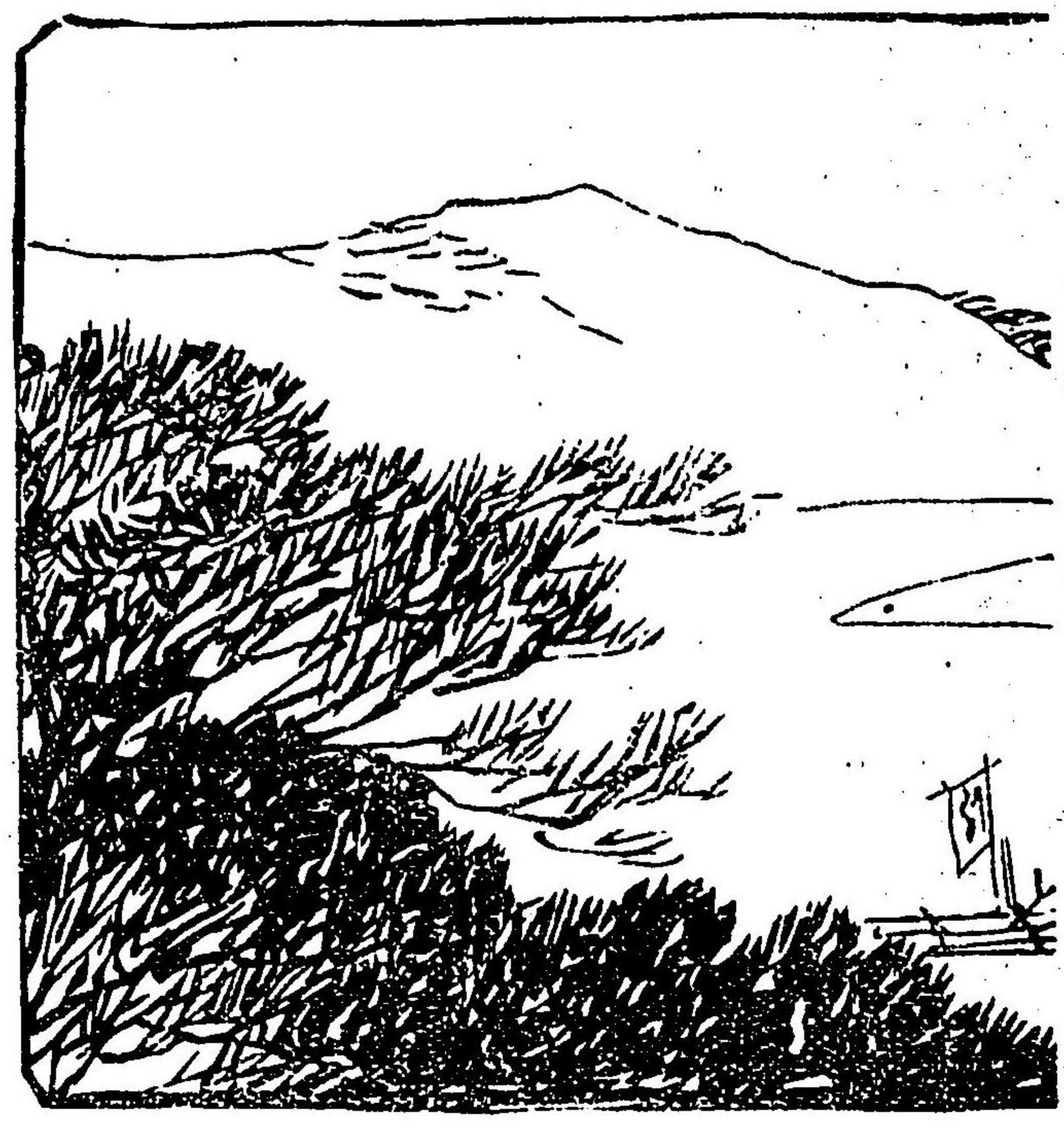
道に戻つて再び道頓堀を通つて真直に歩いて天王寺に行た。門を入つて並木の間を行くと、廣い境内には金堂、講堂、五重塔などがあつて、これが大阪第一の大寺である。今のは新しいものだから、この四天王寺は聖德太子の立てられたもので、佛法最初のお寺である。

と聞いた。境内には大きい樹や奇麗な花などがあつて公園になつて居るので、人が随分遊びに来て居る。此寺に大きな釣鐘がある。京都の智恩院の鐘が大きいと云つてもトテモ此鐘には及ばない。日本第一どころか恐らくは世界でも最も大きいものであらう。前年大博覧會があつた頃に出来上つたので、如何にも珍らしいものである。一休みして、前年の大博覧會のあとへ行て見た。廣い處であるが美術館だけが残つておて、名高い楊柳觀音の噴水が寂しさうに



茶

立て居た。すぐ側らに樹が深々と茂つた小高い處がある。お父様は之を指さして、『あれは茶白山と云つて、昔し大阪陣の時

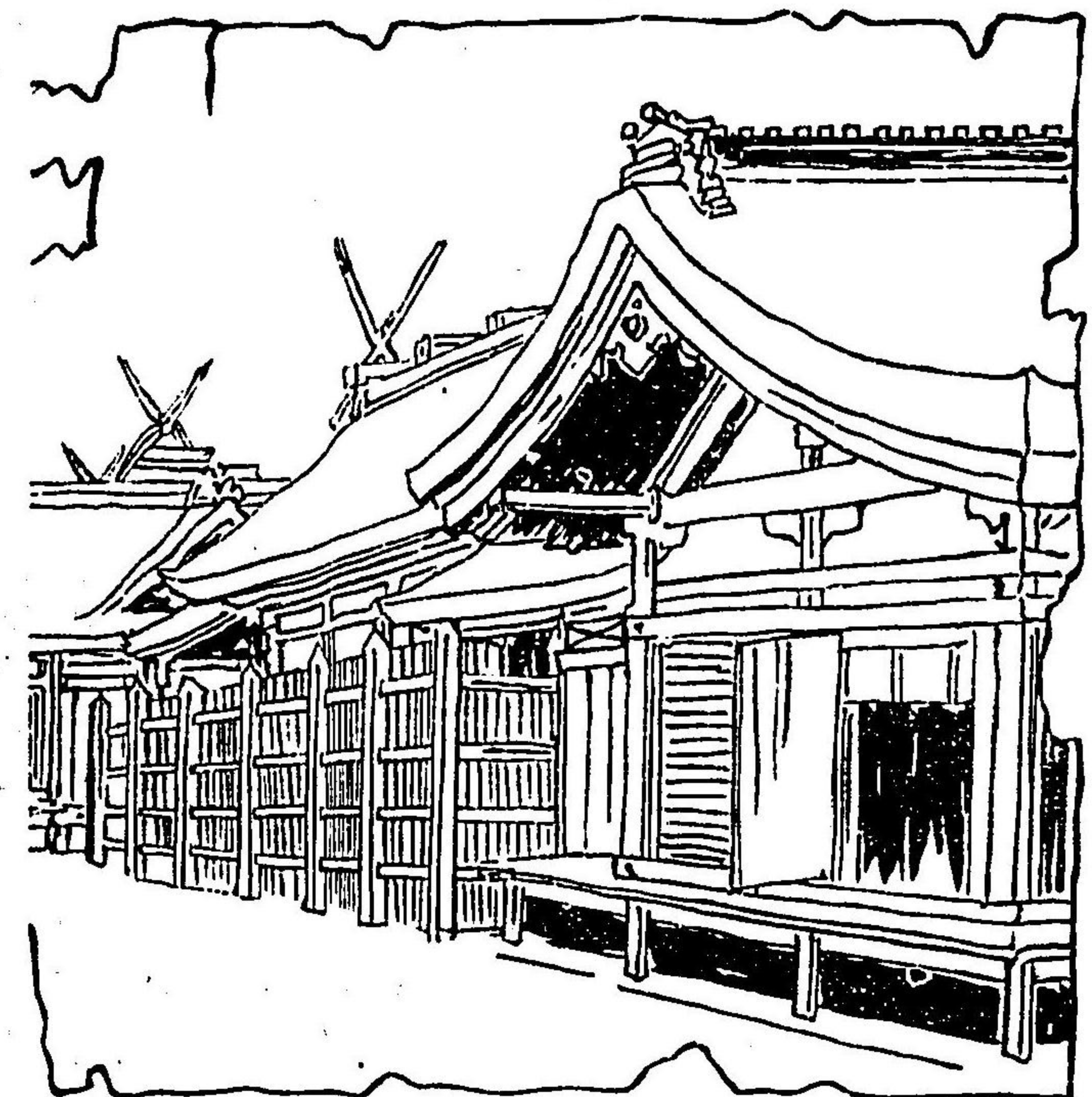


山 白

行つた。これは仁徳天皇、仲哀天皇、應神天皇、神功皇后及び履中天皇を祀つてあつて高い石壇を登ると舊い松樹などが澤山茂つて居

真田幸村が此處に陣取つて關東勢(家康の兵)を悩ました處である。あすこに池がある。あの池が其時の濠の跡である………それから、あの方には禪寺があるが至て閑静なよい處である』と仰しやつた。谷町を通つて高津神社に

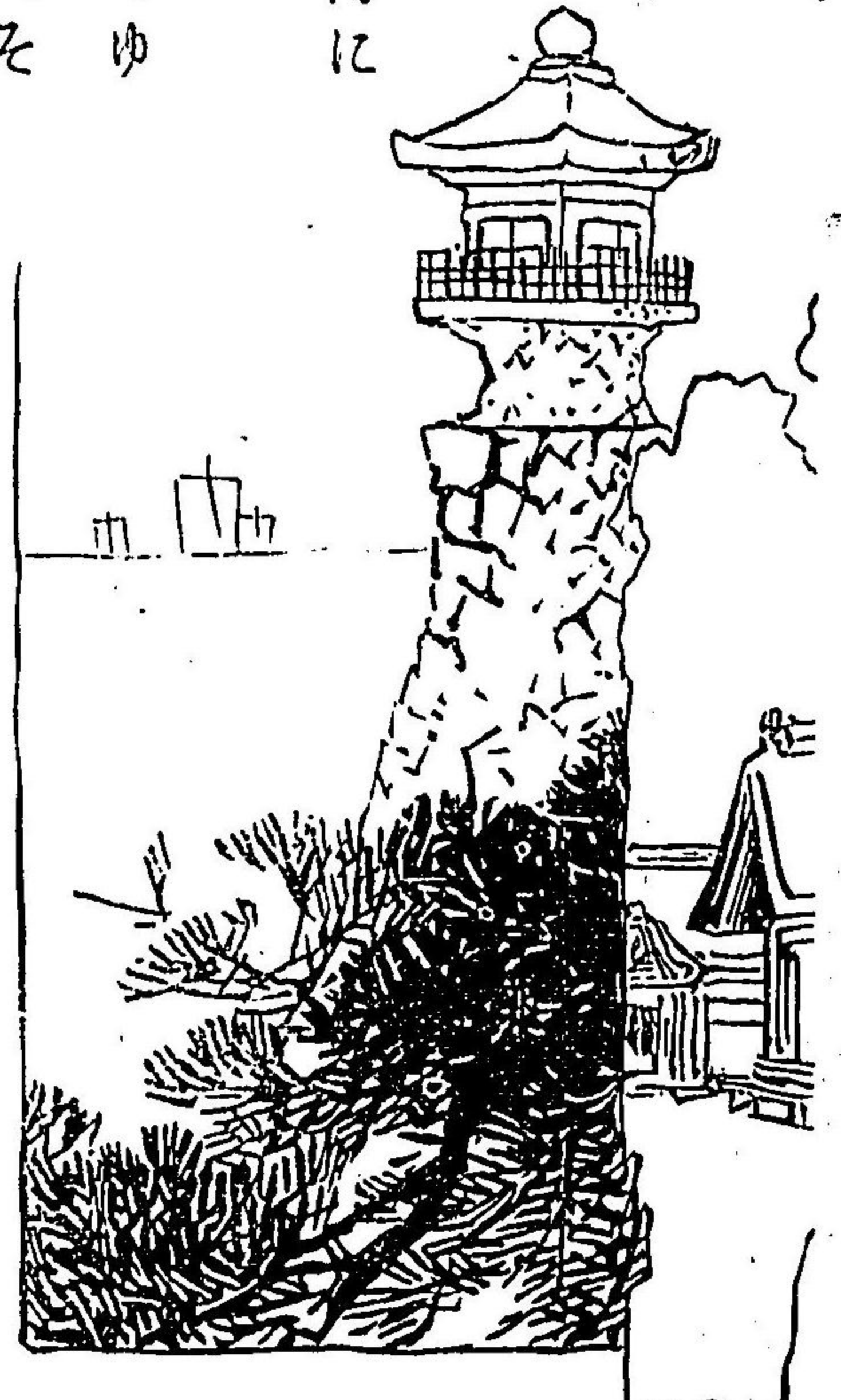
る。本社の横に石の上に築いた舞臺がある。此舞臺に上れば町中が
 眼の下に見えて、一寸程の馬や豆の様な人がある。いて居る。遠くは
 川口に往來する舟や三軒
 屋あたりの煙突から黒い
 長い煙が上つて居るのが
 見えて、誠にいゝ眺望で心
 がさつぱりした。
 北の方へあるいて大阪城
 に行つたが、大きい石垣で
 取まいてあつて、其壯大な
 ことは話にならぬ。この城
 は天正十一年に秀吉が築
 いた名城で、難攻不落と稱



住吉の高

へられて居つた。
 此等の大きい石は
 諸國の大名から寄
 進したものである。
 今は第四師團が此内に
 ある。

城に沿うて歩行いてゆ
 くと、京橋口といつてそ



燈籠

こが大阪陣の時、片桐且元が堅めて居た處だそうだ。
 天満橋を渡つて、天満天神に參詣した菅公を祀つてある。毎年七月
 廿五日に祭禮を行ひ、神輿を舟に載せて川を下り、川の中では處々
 に篝火を焼いて大變に賑やかであるとの話。この神社の廣い境内
 を散歩して、車で櫻の宮に行つた。この宮は淀川の東にあつて、天照

太神を祀つてある境内には松の樹が多い。堤には櫻が植つて居る。花盛りには大變賑やかださうだが丁度花の散つたあとで人出も少なく静かであつた。西の方、川の向に造幣局が見える。中々眺望のよい處であちらちらと散歩して居る内に日がそろく暮れかゝつて源八の波といふ船渡のあたりは霧の中に包まれてしまつた。

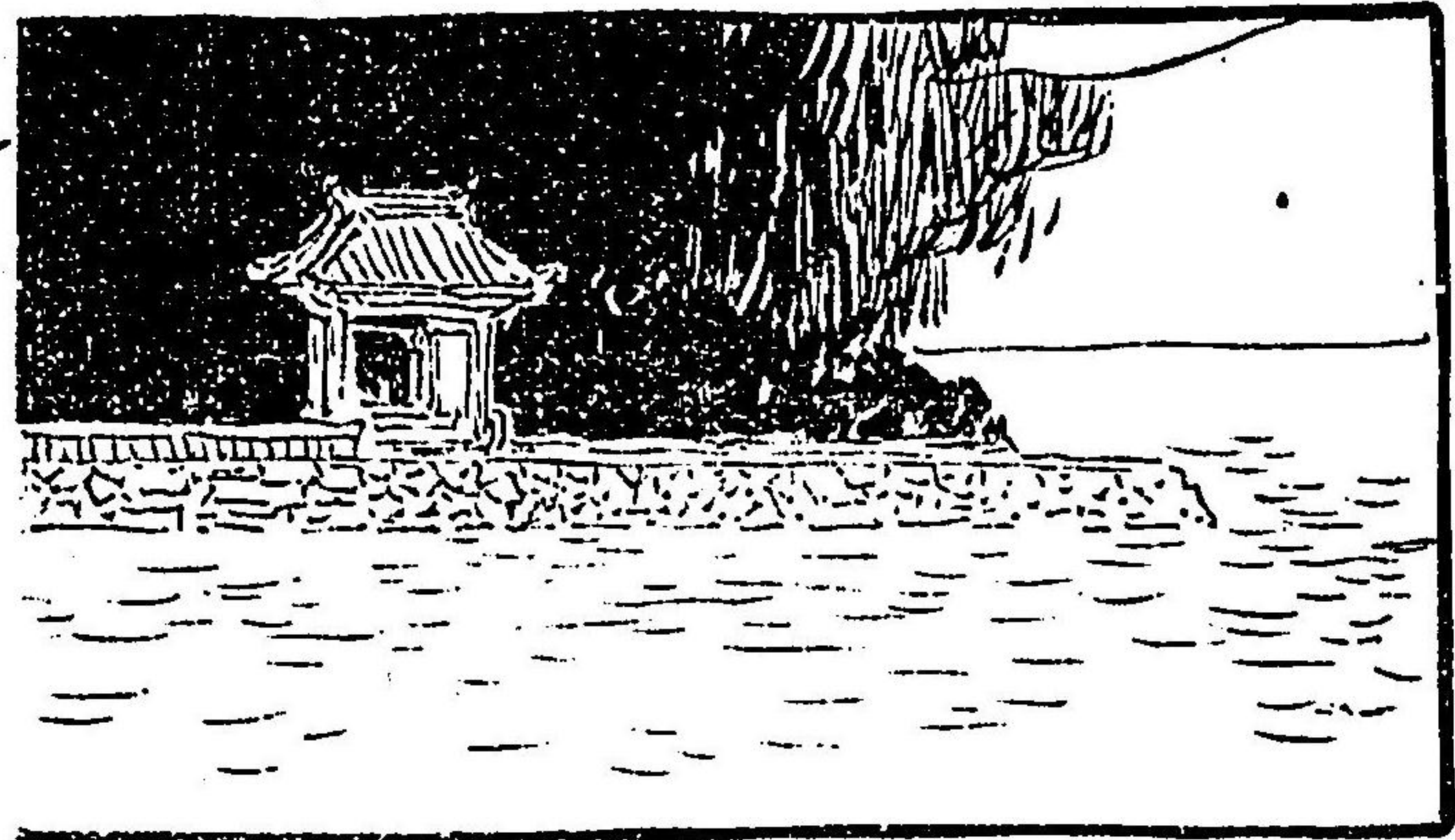
翌朝難波停車場から大阪をあとに見て、住吉神社に参詣した。華表を入ると泉水の上に反橋がかゝつて、境内は廣くて一面の松林である。甘丁程西の方へ行くと松の間に高い黒い常夜燈がある。これが住吉の高燈籠とて名高いもので、其形が古風で如何にも珍らしい。丁度潮干の時分で大勢の人が海に出て居た。潮干狩をして見たいとは思つたが前途を急ぐのでまた汽車で

(三) 堺

に行つた。堺は和泉國では第一の市で、人口も多く町も奇麗である。昔は名高い港であつたさうだ。大濱に行つてみれば前には茅渚の海が渺茫と廣がり、之を隔て、遙かに遠方の山々が見える。緩い静かな波浪がのたりくと岸の石垣を洗つて居る。妙國寺の大きな蘇鐵を見にいつた。高さは三間餘もあつて、大枝が廿三本もある。四百年餘もたつたものださうで實に見事なものである。長閑な春の景色を眺めて、街道を歩行いて濱寺公園に着いたが此濱はいはゆる白沙青松で何とも云へぬ程奇麗である。西には淡路、北には播州の山々、南には紀州の山々が霞んで見える。

『此邊は一帶に高師の濱と云つて昔しから歌などにも澤山出て居る名所である』

とお父様のお話であつた。



(三) 和歌の浦

此處から汽車で二時間程和歌山市に着いた。町を通りぬけて和歌の浦に行く。先づ權現堂に上つて見ると、灣の入りこんだ景色東の方には紀三井寺を見渡して、誠に飽かぬ眺望である。堂を下れば、望海樓の舊趾がある。是は昔し聖武天皇の行幸があつた所で和歌の浦を一面に見晴らす。
山邊赤人が和歌の浦でよんだ歌に
和歌の浦潮みちくれば潟をなみ
葦邊をさして田鶴なきわたる



浦
と云ふ歌がある。この歌からとつたものとみえて、東の方に下りて玉津島明神の下に、葦邊の茶屋といふのがある。それから珍らしい支那風の目鏡橋を渡ると、小さな島で寺もあり、塔もあつて一寸奇麗な處である。橋を渡つて紀三井寺に行つたが、先の權現堂も玉津島明神も一目に見えて、青々とした波の色や松の蟠つた工合はどうしても畫の様である。折から日が暮れかゝつて西の空は金色に、水と山とは緑色となつた。和歌山に歸つて泊つた。

(二) 高野山

は 翌朝高野山に上るつもりで出發した。汽車が粉河に來た時、お父様

「此處には名高い粉河寺があつて餘程古いもので三十三番の觀音の札所の一である。また此處から少し隔つた處に根來寺と云ふのがある。即ち大傳法院と云ふので眞言宗新義派の本山で、中々大きいものである。」

と話して下さつた。

高野口で瀛車を下り、紀川を渡つて坂道をゆくと、九度山で、是は昔し眞田幸村が住つて居たので名高いところ。三四里程行て峻しい坂を登ると、女人堂がある。女はこゝからさきには上ることが出来なかつたのださうだ。女人堂からはズツト平地で佳い路である。兩側に寺や堂が並んで居る。金堂に詣で、町を行くと、町端に一ノ橋があつて、これから十八丁の間は樹が森々として、諸大名の墓が何千となく其間に並んで居る。曾我兄弟、明智光秀、石田三成の墓もある。信玄と謙信との墓が向ひあつて居る。太閤朝鮮征伐の時敵味方

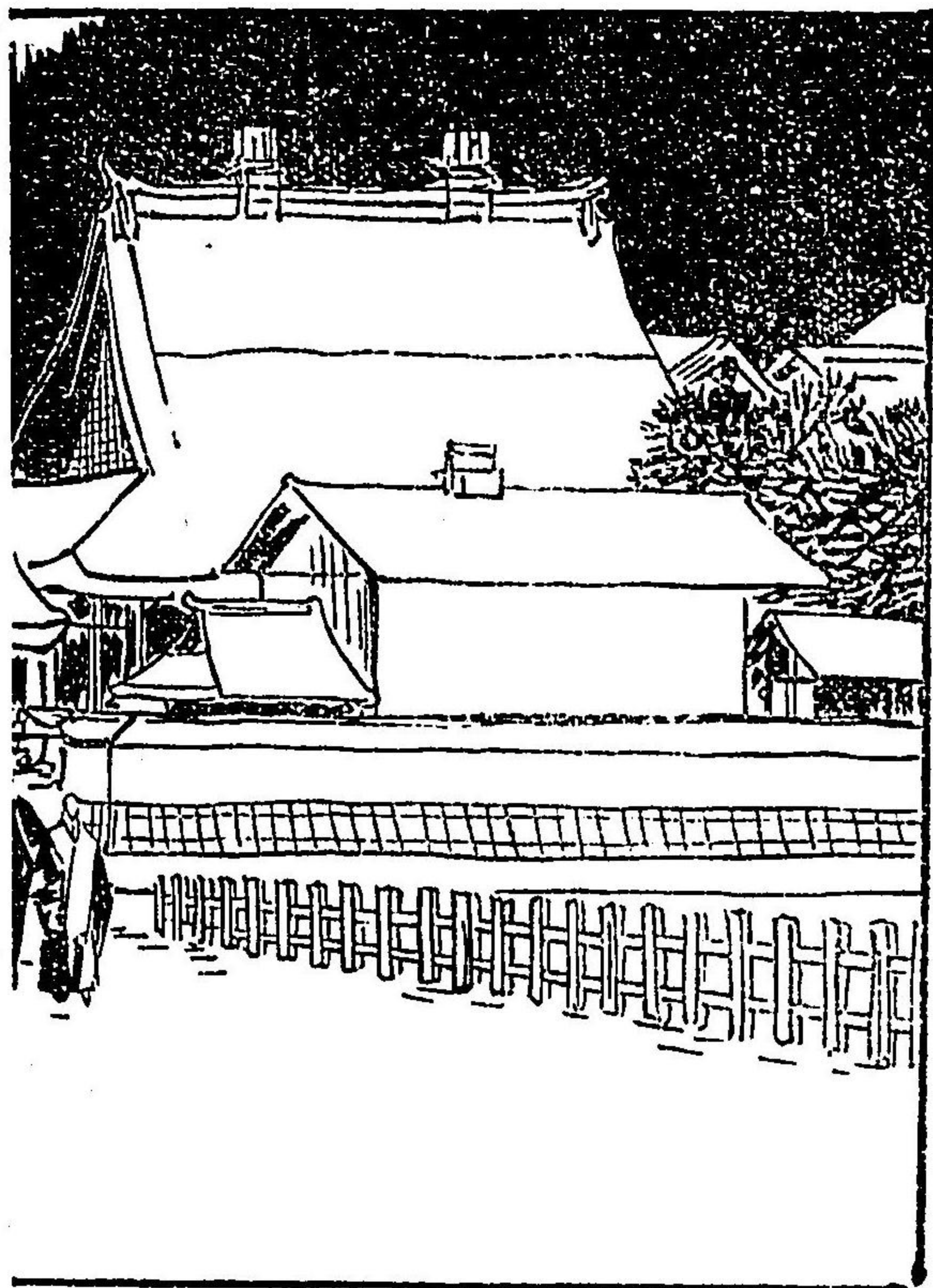
の菩提を吊ふ爲めの碑もある。二ノ橋、御廟橋を渡つて奥之院にいくと大きな樹が茂り合つて日光を洩らさぬから、晝も尙ほ暗い。其奥に不斷の燈明が點つて居る。餘り静かで寂しいので、心が引付けらるゝ様であつた。

「お父様、此奥の院は誰を祀つてあるのですか。」

「これは高野山を開いた弘法大師(空海)の廟であるが、弘法はかう云ふ高山を開いて眞言宗を創めた豪い坊さんで、叡山を開いた傳教大師と同じ時代の人で、諸國を行脚して廣く佛法を弘めた。イロハ歌を作つたも此人であるといひ傳へてある。當時は皇室の御信仰も淺からぬので、御歴代の上皇で此山に御幸になつたことは度々ある。」

奥の院の横に御歴代の御陵があつたから、拜禮して町に歸つて泊つた。

『お父様、此山は大へんに広い様ですね』
 『かう云ふ高い山の頂上にかう云ふ広い平地があるのは誠に珍らしい。この山は周囲に峯があつて、遊華八葉の形を爲して居ると云ふので名高い』



翌朝山を下りて學文路に出、紀の川を渡つて橋本に出、これから汽車で千早、金剛、葛城の山々を左に見て色々南朝の話を聞きながら五條に着いた。大きい町で戸数が千五百程もある。中學

向から眺むると、寺の臺榭が木の間に幽かに見えて、殆ど畫の様なものである。五條から三里餘あるいて六田に行つたが、六田は吉野川の渡場で、こゝを渡ると



校もあつた。榮山寺へ行たが、これは役小角の建てたのださうで、余程舊いものであつて、今は只一部分だけが残て居る。此寺の鐘の銘は小野道風が書いたと云ふのでなかく名高い。寺の前に川がある。川

(五) 吉野

になる渡場には柳が青々と茂つて居た。お父様は

「これからは吉野山であるが昔延元元年後醍醐天皇が足利尊氏の専横を御憤りあつて叡山から此處に御移りになつたので、日本の歴史を讀むものは、此事に就いては誰れでも憤慨せずには居られぬ。この山は櫻でも名高いが歌書よりも軍書にかなし吉野山と云ふ古句がある通り、如何しても歴史の感が深い」

とお話なされた。行く程には、や櫻の樹が澤山あつて南朝の忠臣村上義光の碑などを右手に見てだら／＼上りに上つてゆくと、一目千本と云ふところに來る。山も谷も見渡す限り櫻の木であるが、残念なことには花が散つたあとで見ることが出来なかつた。大門を潜ると藏王堂である。金峰山寺の本堂で、十八間四面の立派な堂で、

本尊(藏王權現)の丈は二丈六尺もある。堂の背後に二天門があるが、其金剛力士は運慶湛慶の作である。堂の前には四本の櫻があつて、昔し護良親王が討死と覺悟して、こゝで舞樂を奏せられた處だと云ふ。阪路をゆくと吉水神社がある。元と吉水院といつて後醍醐天皇の行幸遊された所で、明治七年から神社に改まつたのださうだ。社司に請うて帝の玉座や義經の居た室などを見た。それから後醍醐天皇の御陵に參拜したが、古い樹の間に木柵で寂しげに圍であつた。天皇が劍を按じてお崩れになつたこと、學校で習つたのをおもひ出した。大抵の陵は皆南向になつて居るが、これは北向になつて居るのである。御陵の下に如意輪堂がある。至てつまらぬ小さな堂である。昔し楠正行が箚箚でかへらじとかねておもへば梓弓の歌を鏝つた扉が寶物になつて居る。

種々見物してから竹林院でとまつた。此庭が小堀遠州といふ人の

作つたので、寂びた見事なものである。

翌朝山を下りて飯貝かち上市に出た。これから道のわるい山路を上るので大分勞れたが、四里程で、多武峰の談山神社についた。藤原鎌足公を祀つてあるが、社殿が宏壯で、屋根は檜皮で葺いてある。境内は一萬五千坪ばかりもあつて、広い。木が森々として、誠によい處である。正殿、拜殿、樓門、透樓、寶庫、浮圖、總社、攝社等、澤山の建物がある。鎌足公の遺骨を葬つてある塔は、高さ四丈三尺で、十三層になつて居る。この後の山は、何か國家に大事件があると、鳴響くと、今でも言傳へて居る。

山を下つて、櫻井に出て、それから二里程で、初瀬に着いて、長谷寺に參詣した。お父様が。

「この寺は、樓門から山を傳うて、九十四間の廻廊があつて、本堂は懸崖の上に建つて居る。境内が三萬坪もあるさうで、いろくくの

堂塔が上下左右に連なつて居る。京都の清水寺によく似て居る。鎌倉の長谷寺はこの佛と同體だといふ。むかしから人の信仰が深く、源氏物語をはじめとして、この佛の靈驗をかいたものは、いくらかもある。これも三十三番の札所の一ツだ。」

翌朝また櫻井に出て、十四丁程行くと、三輪で、此町は、索麵が名物である。町の東に三輪山があつて、山の麓に大神々社がある。官幣大社で、大物主命を祭つてある。この社には、拜殿だけあつて、正殿が無い。「昔、この神さまが人の形となつて、大迹々姫命といふお姫さまの處へ通つてゆかれた姫は、この神のお歸りの時、着物の裾へ糸をつけて置かれたが、あとでその糸を尋ねてこの山にきた。その時、糸が三輪残つたので、三輪といふのである。」
古い話を承つて面白くおもつた。

(三) 神武陵

又々櫻井に歸つて、汽車で畝傍停車場に着いて、神武天皇の御陵に参拜した。二千五百年の昔を想つて、嚴肅な感を起した。御陵の南に榎原神宮がある。神武天皇と姫踏鞴五十鈴媛皇后を祀つてある。

「此地は國祖たる神武天皇が御即位の大禮を行はせられた榎原宮の舊趾であつて、國民の最も崇敬すべき所である。」とお父様のお話を聞いて、心が改まる様であつた。北は碧々とした畝傍山で、西と南とは松樹が澤山茂つて居る。外域には鏡の池と云ふがあつてこれに石橋が架けてある。一の鳥居から二の鳥居に入る。と門があつて其左右はズット土塀を造らしてある。此内に正殿、拜殿、倉庫、社務所などがある。お父様は

「この正殿は皇居の内侍所を模し、拜殿は神嘉殿を模した者である。」

と仰しやつた。

ゆるく参拜をすまして、汽車で出立したが、お父様は

「あの北に見ゆるのは耳成山で、南にあるのは香久山と畝傍山であるが、この三つを大和の三山と云つて昔から種々の物語も傳はつて居る。」

と話して下された。汽車が高田に來た頃、お父様はまた

「是れから西一里程の處に當麻寺と云ふのがある。是は千年も経た古い寺で、建築も立派であるし、また寶物なども餘程見事なものが多い。殊に中將姫の蕪絲の曼陀羅は最も名高いのである。境内には櫻が澤山植つてある。」

と話して下された。

王寺で汽車を乗換へて大阪の湊町停車場に着いた。
翌朝。

(三) 神戸

に向て出發したが、梅田から少し行くと、神崎である。此處で他線に乗換へる人が多かつたから、お父様に尋ねたら、

『あの線は阪鶴鐵道で舞鶴まで行くのである。有馬の温泉に行く人もあの汽車で行く。有馬は古い温泉場で、諸國から來る人が中々多い。』

と仰しやつた。尼崎を通つて、明智光秀のことなどを想つて居る内に、汽車は西の宮邊に來た。

左は御前の濱と云つて昔し神功皇后が三韓から凱旋をなされた時、筑紫から此濱に御着船になつたと云ひ傳へてある。砂濱に松の

並樹が見えて、波の穏やかな海を隔て、遙に泉州の山を見る。此濱の續きを打出の濱と云ふ。右の方には六甲山脈が蜿蜒と連なつて、禿頭を顯はして居る。甲山は圓くて、饅頭みた様である。神功皇后の時に出來た廣田神社やまた阿保親王の墓などを右に指顧して行くうちに、蘆屋の里を通つた。昔しは月や螢の名所であつたさうで、在原業平が若かつた時分に別荘をたて、居たとお父様の御話を聞いた。岡本の梅林を眺めて、住吉停車場を通ると、御影の町端の道の左傍に圓い小高い丘みた様なものがあつて、其上に松が二三本立つて居る。お父様は之を指して

『あれは求女塚といつて此邊に三つある。あとの二つはやはり此さきの道傍にある。昔し二人の男が一人の女を争つた時、女は水禽を射當てた方に従はうと云つたから、二人は生田川で水禽を射た。一人は頭、一人は尾を射たものだから、女は困つて生田川に

114
身を投げて死んだ、それで墓が此様に三つあると昔からの言
傳である」

と話して下された。

六甲山脈の禿頭が盡きようとする處に樹木の鬱葱とした高い峯
がある。お父様は

『あれは摩耶山で山頂に古い寺がある、神戸あたりから参詣する
ものが絶えない。外國人も澤山行く。中途に赤松圓心の城跡があ
る』

と仰しやつた。

脇の濱を過ぎ、新生田川を渡つて、神戸の町に入り、三宮停車場で下
車して、生田神社に参詣した。神功皇后の時に建てた社で、背後の森
を生田の森と稱へて、昔し源平の戦に梶原景季が、籠に梅枝を挿ん
で戦つた處である。境内には、籠の梅梶原の井、敦盛萩などがある。布

115
引の瀧に行つたが、最初に見たのが、雌瀧で幅は二間ほどあつて高
さは七丈あると云ふ。水は岩角に觸れて、澗々と音がして居る。瀧壺
は水道工事の爲めに、廣く深く湛えられて居る。左の方の山路を喞
ぎく登ると、雄瀑がある。高さが十五丈幅が十三尺、斷崖から落ち
るその勢は實に凄まじい。少し茶店に休んで居ると、寒くなるやう
で、話聲も聞えぬ程である。山を下りて北野を通つて、諏訪山に上つ
た。高い處で神戸の街は直ぐ眼下になつて、海には多くの船が往來
して居り、東は住吉御影から大阪までも、西は須磨のあたりまでよ
く見える。山上には金星觀測の紀念碑があつて、其近邊に茶店があ
る。下の方に有名な温泉があつて、なかく賑かである。山を下りて、
西洋風の家屋がずらりと並で居る町々を過ぎて、湊川神社に参詣
した。門を入れて、すぐ右に有名な嗚呼忠臣楠子之墓がある。是は水戸
光圀卿の建てたもので、字は朱舜水である。境内は廣々としていろ

くの店などがある。水族館も立派で、珍しい魚類が澤山泳いで居る。此社は開港前迄は田圃の中にあつたさうだが、今は最も繁華な處になつて居る。社を出て湊川を見たが川とはいへ、道よりもズツと高くなつて、兩側に松柏が茂つて居て、堤の上は今全く遊園地になつて居る。昔し清盛が都を移した福原は此邊でもあらうかとお父様は御話なされた。

兵庫に行つて清盛の塔を見たが、十三層の石の塔婆で、弘安九年に建てたと彫付けてある。和田の岬まで行つたが、別に見るものは無い。海に突出た砂濱で汽船がすぐ其近くを通るのが面白かつた。濱に立つて兵庫神戸の灣を眺めて、昔の清盛の事などを想ひ出した。

(六) 須磨舞子

兵庫停車場から汽車に乗つて右に鷹取山を眺めて、須磨に行つた。

其海の奇麗な事、松の並木や、漣が岸を洗つて居る景色、釣舟は木の葉の様に浮んでゐて、まるで繪の様であつた。二丁程歩行くと須磨寺で、小さな壞れかゝつた山門を潜つて、石壇を上げれば本堂がある。敦盛が持つて居た青葉の笛、辨慶が書いた櫻の制札、敦盛自筆の和歌、木像などを見た。

昔し源平の戦の時に平敦盛が僅か十六歳の若武者で花々しいはたらきをして、遂に熊谷次郎直實に組伏せられて討死をしたと云ふので、此邊には敦盛の舊跡が多い。芝居では熊谷が其時自分の子小次郎を身代に立てたとつくつてあつて、哀れな物語がある。なにしろ熊谷は哀れな情に堪へ無いで、先日見て来たあの京都の黒谷に入つて坊さんになつたと云傳へてある。』とお父様から委しい話を聞いた。寺の境内から西の方、田圃道を行くと有名な一の谷である。源平の古戦場で、平家が安徳天皇を奉じ

て假に皇居を設けた處である。今は狭い谷間であつて百姓が柴を
 負つて歩行いて居た。續いて二の谷、三の谷がある。鴨越、鐵拐ヶ峰は
 北方に聳えて居る。お父様は此時地圖を開けて山を指さし

「義經はあの鴨越の道の無い險阻な處を驅け下つて城に火を放
 けたから、平家は大に驚いて舟に乗つて屋島の方へ逃げた。多年
 榮華を極めた平家も段々亡びかけたのである。其時畠山重忠が
 馬を賣うて下つたと云ふのは此邊の谷であらうが今はこんな
 つまらぬ谷間で、少しも昔しの面影が無いのであらう。鴨越とい
 つても今は廣い車の通りさうな通が付いてをる。七八百年も經
 と全く變るものだ。人間の世も長い様で短いものサ」
 と仰しやつた。後は暫らく無言であつた。

谷間から濱街道に出て敦盛の墓を弔ひ飽かぬ佳い景色を眺めな
 がら舞子に行つた。此處の景色は須磨にも優つて、淡路島は手に取
 る様に見え、白帆の行きかふ様得も言はれず、濱の松は高く立つて
 あるのもあれば低く地を匍匐つて居るよゝなものもあり、或は龍の
 蟠つた様なものもある。濱邊の宿屋に泊つたが、夕暮の海は淡路あた
 りから紫色になつて暗くなると、東から月が出て、穏やかな波の上
 に銀色の光を流した。

これからさきまだ方々を見物する積であつたが、お父様の急用で
 にはかにかやめになつて、東京へ戻つた。東海道から伊勢へ出て、奈良
 京都の古い都を見物し、比叡山、高野山にも上り、湊川も一の谷も見
 て、歴史で習つた處も大概は見盡した様な心持がした。その中には
 又四國から九州までもつれていつてやらうとお父様の御約束を
 樂にしてゐる。

(終)

明治三十八年二月二十三日印刷
明治三十八年二月二十七日發行

內地旅行

定價金貳拾錢

印發
刷行
者兼

金港堂書籍株式會社
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代表
表者

右社長

原亮一郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

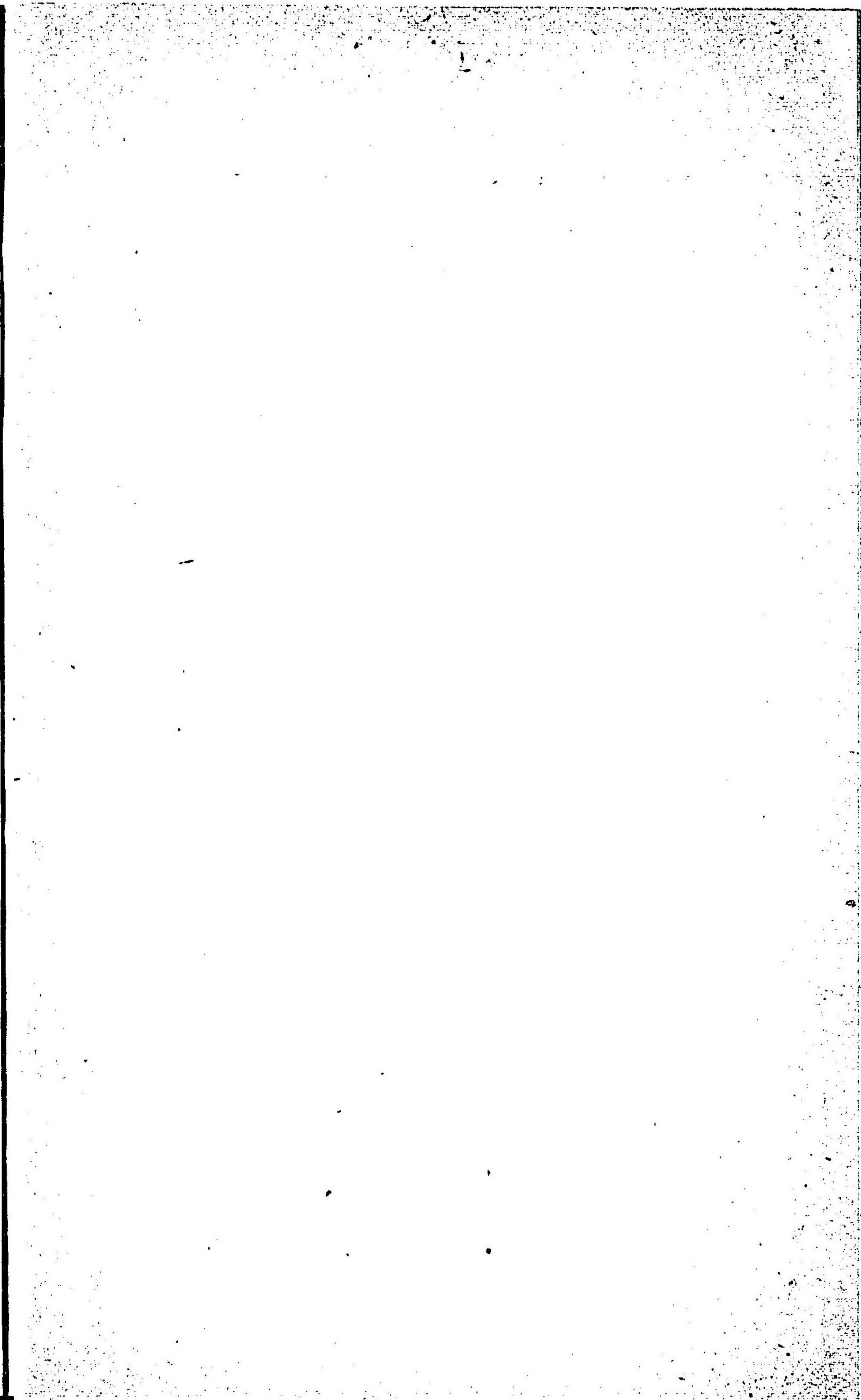
印刷
所

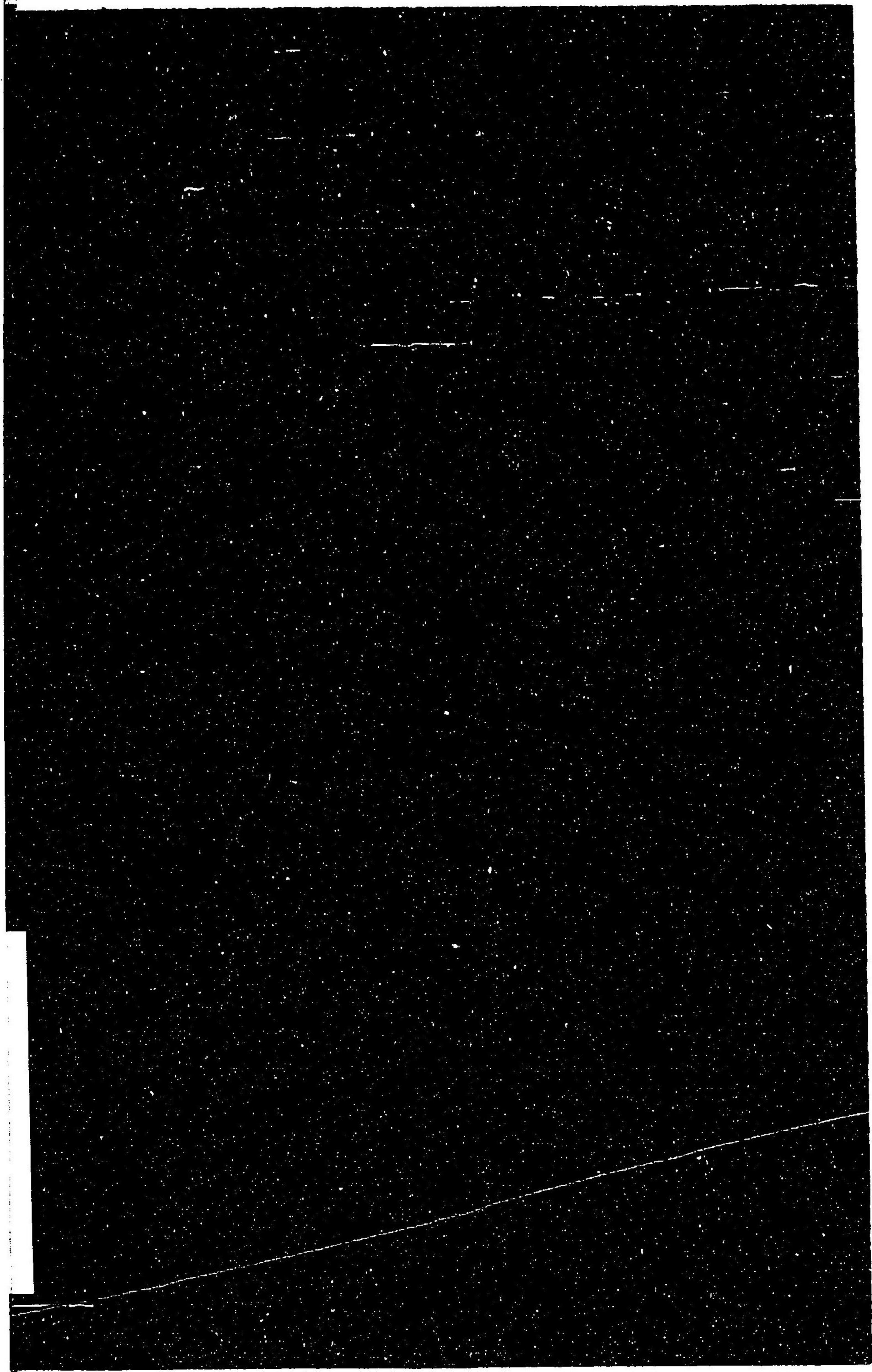
合資
會社
東京
國文
社
東京市京橋區宗十郎町十五番地

賣捌
所

各府縣特約販賣所

不許複製





特 20

903

内地旅行

国立国会図書館

022737-000-4

特20-903

内地旅行

芳賀 矢一/著

M38

ADB-0525

